市民社会をつくる
ボランタリーフォーラム
TOKYO2019

市民社会をつくる
ボランタリーフォーラム TOKYO2019

イロドリある未来へ
～わたしから踏みだす一歩～

≪報告書≫

2019年
2月8日（金）～10日（日）

3日間開催します

会場 飯田橋セントラルプラザ ほか

主　催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2019実行委員会　後　援 東京都
特別協賛	株式会社ガイア、株式会社三菱UFJ銀行、生活協同組合パルシステム東京、中央ろうきん社会貢献基金、トヨタ自動車株式会社
協　賛	NECネッツエスアイ株式会社、NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド、公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団、公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団、東京都生活協同組合連合会
協　力	ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

（五十音順）

もくじ

はじめに
第１章　企画編
　市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019 ができるまで・・・・・・・・・　2
第２章　実施編
　市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019 開催概要・・・・・・・・・・・　6
　各プログラム実施報告
　01　人生 100 年、二毛作ライフで活き活き生活！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
　02　日本に難民？ ～難民支援から人権を考える～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
　03　ボランティア・市民活動センターは未来をひらく!?・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　04　東京 2020 オリンピック・パラリンピックを一人ひとりのレガシーにするために・・　14
　05　-すべての子どもが輝ける未来へ- 子どもの性同一性障害・・・・・・・・・・・・・　16
　06　多様に広がる「地域の居場所」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18
　07　福祉の最先端はここまで来ている！～「超福祉」の視点から最新の福祉のテクノロ
　　ジーやデザインの動向を学ぼう～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
　08　海にあふれるプラスチック ～生活ごみからマイクロプラスチックまで～・・・・・・　22
　09　映画『いのちの深呼吸』上映会&『生と死の体験ワークショップ』・・・・・・・・・　24
　10　フィールドワーク 阿波おどり大解剖！～地域をつなぐ要素を探る～・・・・・・・・　26
　11　連続かつ広域な自然災害の時代に ～報道されない被災地のいま～・・・・・・・・・　28
　12　「子ども食堂」の魅力 食から子どもを支える、繋がる～社会と子どもが出逢う場所～　30
　13　キャリア×NPO～キャリアとして社会貢献していきたい若者をどう支えるか～・・・　32
　14　人と人とがつながる「協同組合」の強い絆 ～暮らしの課題を解決するために私たちが
　　知っておきたいこと～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　15　難病当事者と語る“働く”ヒューマンライブラリー・・・・・・・・・・・・・・・・　36
　16　途上国から学ぶ地域づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38
　★　話そうカフェ　IRODORI（イロドリ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
　17　地域にふれる第一歩～体験だけで終わってない？ホントの福祉教育について考えよう～　42
　18　子どもの権利条約から 30 年 ～子どもと大人が共存する豊かな地域～・・・・・・・　44
　19　～持続可能な社会を目指して～SDGsの取り組みにおける学生ボランティアの可能性
　　を探ろう！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　46
　20　私たちが求める地域のカタチ ～地域包括ケアシステムを超えて～・・・・・・・・　48
　21　助成金は「想い」もつなぐ ～出し手と受け手の「幸せな出会い」のために～・・・・　50
　22　困っている人に声をかける勇気 ～ヘルプマークを見かけたら～・・・・・・・・・・　52
　23　あなたも教育の担い手になろう ～「開かれた教育」を考える～・・・・・・・・・・　54
　24　対話から始まる市民発の民主主義 ～シリアの事例から考える～・・・・・・・・・・　56
　25　若者が動き出すボランティアの受入れ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
　26　芸術のバリアフリー 音声ガイドをつくろう！・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
　27　音と光がない世界「盲ろう者の生活を知る」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　62
　28　クロージング企画（参加費無料）本当のボランティアって何だ？！・・・・・・・・　64
　29　Open Café（休憩スペース）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66
　30　ふれあい満点市場～NPO・NGO の作品展示販売～・・・・・・・・・・・・・・・・　68
　31　情報誌『ネットワーク』表紙原画展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69
（参考）市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況・・・・・・・・・・・・・・　71
実行委員会名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　72
協賛・協力団体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　73

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんてぃあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019」（以下、「Vフォーラム」）では、「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」をテーマに、28 分科会、3特別企画を実施し、のべ 920 名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

＜第 1 章＞

企 画 編

ボランタリーフォーラムができるまで

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO（以下、「V フォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして 2004 年から始まり、今年で 15 回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員、それぞれの一歩につながることを目的としています。

実行委員会について

V フォーラム実施にあたり、今年度のフォーラムの方向性を検討するために、準備会を３回開催しました。準備会では、これまでのフォーラムを振り返るとともに、今年度の目標、取り上げたいテーマやキーワード、実行委員のあり方などを話し合いました。

その後、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーからなる実行委員会を立ち上げ、企画や当日の運営体制に関する話し合いを始めました。実行委員会は、振り返りの回を含め、10 回開催しました。

今年度の方向性は、「新たな社会課題を明らかにしていく」「今、取り組まなければならない課題を取り上げる」「フォーラムで話し合われたことを身近な地域に持ち帰る」こととし、分科会の企画は常にその方向性に立ち返りながら検討を進めていきました。

実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じる社会課題や関心事を、キーワードとして出し合いました。挙げられた多様なキーワードを「参加・人の力」「ダイバーシティ（理解・共生）」「カタチ」「時代・未来」の４つのカテゴリーにまとめました。実行委員は、それぞれのカテゴリーに分かれ、分科会を企画しました。

分科会企画については、分科会の企画案を持ち寄り、カテゴリーや実行委員会全体で企画内容について何度も話し合いを重ねました。こうした分科会の企画を進めると同時に、V フォーラム全体に関わる運営については部会を設けることで話し合いを進めました。

今年度は、当日までの運営に関わる「ファンドレイジング」「広報」、クロージング全体会や「話そうカフェIRODORI（イロドリ）」の開催の有無を検討する「全体会」の３つの部会を設けました。部会では、「どのように協賛・協力を拡大していくか」「効果的に広報するにはどうするか」「どのように参加者を募るか」といった話し合いを重ねました。終了後のアンケートでは、回答者 143 名のうち、約７割の方が「初めて参加した」と回答しており、より多くの方に V フォーラムを伝えることにつながりました。さらに、新たな交流会企画、「話そうカフェIRODORI（イロドリ）」についても部会での検討を重ねることで、より

参加しやすい形の企画になり、「分科会でご一緒した方とまたお茶をいただきながら話せたことがよかった」等の声もありました。

今回は、変わりゆく時代に見えてきた社会課題について、多くの人たちと対話する場として分科会を企画してきました。テーマは「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」。対話を通して気づきを得て、新たな一歩を踏みだす。それが一人ひとり輝く彩りある未来につながっていく、そんな想いがこのテーマにこめられています。

分科会企画案の公募

これまでのＶフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、昨年度に引き続き、分科会企画案を公募しました。分科会企画案の公募が採用された場合もそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきました。また、他の分科会についてともに内容を検討し、Ｖフォーラム全体の運営にも関わっていただきました。

募集概要と実施結果

【内容】

- ボランタリーフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供
- 2019 年２月８日（金）～10 日（日）の内１コマ
- 予算は、30,000 円まで

など

【条件】

- 実行委員会への参加が可能であること
- 企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること
- 40 名定員の会場内で実施できる規模の企画など

【応募方法】

- 所定の企画書（A4 サイズ２枚）に記載の上、郵送・メールにて申込み

【応募期間】　2018 年５月 29 日（火）～６月 11 日（月）

【結果通知】　2018 年６月 14 日（木）

実施結果

- 件数　７件

- 応募者所属内訳

市民活動団体・・・・・・・・・・	１人
ボランティア・市民活動推進団体	１人
大学生・・・・・・・・・・・・・	１人
ＮＰＯ法人・・・・・・・・・・・	３人
任意団体・・・・・・・・・・・・	１人

選考のポイント

- 社会課題をテーマにした企画である
- 広く一般を対象にした企画である
- 多様な市民の参加が期待される企画である
- 本フォーラムで波及効果が期待される企画である
- 他団体との連携・協働が求められるような企画である

＜第 2 章＞
実 施 編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019
開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会課題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004年から開催しています。企画運営は実行委員会形式で、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動に関わるメンバーで組織しています。

今回は、変わりゆく時代に見えてきた社会課題について、多くの人たちと対話する場として分科会を企画してきました。テーマは「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」。対話を通して気づきを得て、新たな一歩を踏みだす。それが一人ひとり輝く彩りある未来につながっていく、そんな想いがこのテーマにこめられています。

参加者のみなさんの声や想いを大切にして、このフォーラムを誰もが参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしていきたいと考えています。みなさんのご参加をお待ちしています。

開催概要

テーマ	イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～
開催期日	2019年2月　8日（金）19：00～21：00 2月　9日（土）10：00～18：30 2月10日（日）10：00～19：00
会場	飯田橋セントラルプラザ ほか
主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019 実行委員会
後援	東京都
参加費	一般　2,000円（1分科会のみ参加の場合は1,000円） 学生（大学生・短大生・専門学校生等）　1,000円 障害のある方　1,000円 高校生以下、または18歳未満の方　無料 ※ フィールドワーク（No. 10）のみに参加される方は、別途交通費。

参加申込者数　419名

出演者　74名

実行委員　25名

運営スタッフ・ボランティアのべ　157名

参加者のべ数　920名

スケジュールと会場

日	時間	会場	分　科　会
2月8日（金）	19:00～21:00	12 階 A 会議室	01 人生 100 年、二毛作ライフで活き活き生活！
		12 階 C 会議室	02 日本に難民？ ～難民支援から人権を考える～
		12 階 D 会議室	03 ボランティア・市民活動センターは未来をひらく!?
		10 階 A・B 会議室	04 東京 2020 オリンピック・パラリンピックを一人ひとりのレガシーにするために
2月9日（土）	10:00～12:30	12 階 A 会議室	05 -すべての子どもが輝ける未来へ- 子どもの性同一性障害
		12 階 B 会議室	06 多様に広がる「地域の居場所」
		12 階 C 会議室	07 福祉の最先端はここまで来ている！ ～「超福祉」の視点から最新の福祉のテクノロジーやデザインの動向を学ぼう～
		12 階 D 会議室	08 海にあふれるプラスチック ～生活ごみからマイクロプラスチックまで～
		10 階 A・B 会議室	09 映画『いのちの深呼吸』上映会&『生と死の体験ワークショップ』
	10:00～15:30	高円寺駅改札前集合	10 フィールドワーク 阿波おどり大解剖！～地域をつなぐ要素を探る～
	14:00～16:30	12 階 A 会議室	11 連続かつ広域な自然災害の時代に ～報道されない被災地のいま～
		12 階 B 会議室	12 「子ども食堂」の魅力 食から子どもを支える、繋がる ～社会と子どもが出逢う場所～
		12 階 C 会議室	13 キャリア×NPO～キャリアとして社会貢献していきたい若者をどう支えるか～
		12 階 D 会議室	14 人と人とがつながる「協同組合」の強い絆 ～暮らしの課題を解決するために私たちが知っておきたいこと～
		10 階 A 会議室	15 難病当事者と語る“働く”ヒューマンライブラリー
		10 階 B 会議室	16 途上国から学ぶ地域づくり
	17:00～18:30	10 階 A・B 会議室	話そうカフェ　IRODORI（イロドリ）（出入り自由）
2月10日（日）	10:00～12:30	12 階 A 会議室	17 地域にふれる第一歩 ～体験だけで終わってない？ホントの福祉教育について考えよう～
		12 階 B 会議室	18 子どもの権利条約から 30 年 ～子どもと大人が共存する豊かな地域～
		12 階 C 会議室	19 ～持続可能な社会を目指して～ SDGs の取り組みにおける学生ボランティアの可能性を探ろう！
		12 階 D 会議室	20 私たちが求める地域のカタチ ～地域包括ケアシステムを超えて～
		10 階 A 会議室	21 助成金は「想い」もつなぐ ～出し手と受け手の「幸せな出会い」のために～
		10 階 B 会議室	22 困っている人に声をかける勇気 ～ヘルプマークを見かけたら～
	14:00～16:30	12 階 A 会議室	23 あなたも教育の担い手になろう ～「開かれた教育」を考える～
		12 階 B 会議室	24 対話から始まる市民発の民主主義 ～シリアの事例から考える～
		12 階 C 会議室	25 若者が動き出すボランティアの受入れ方
		12 階 D 会議室	26 芸術のバリアフリー 音声ガイドをつくろう！
		10 階 A 会議室	27 音と光がない世界「盲ろう者の生活を知る」
	17:00～19:00	12 階 A～D 会議室	28 クロージング企画（参加費無料）本当のボランティアって何だ？！
2月9日（土）・10日（日） 10:00～17:00		10 階フロア	29 Open Café（休憩スペース）
2月9日（土） 10:30～15:30		1 階区境ホール	30 ふれあい満点市場～NPO・NGO の作品展示販売～
開催期間中いつでも		10 階フロア	31 情報誌『ネットワーク』表紙原画展

０１　人生 100 年、二毛作ライフで活き活き生活！

開催目的

「人生 100 年、第２の人生、定年後の生き甲斐って何？ 二毛作ライフって？ どうやって始めたらいいの？ 」

現在も仕事一辺倒の日々を繰り返し、仕事場以外で活動することの素晴らしさに出会ったことがない人々が多く、最近は定年に近づくにつれ、これからの人生の過ごし方に不安や焦りを感じる声を耳にすることも多くなりました。

本分科会は、第２の人生として、もしくは仕事を持ちながら、地域活動・社会貢献を実践されている方々をゲストとしてお呼びし、ディスカッションを通して、参加者の皆さんが、それぞれの「生き甲斐」、「人生の満足度」を発見、再発見の場にする目的で開催しました。

開催日時

２月８日（金）19:00～21:00

参加者数

36 名（参加者 29 名、出演者４名、スタッフ３名）

出演者

莇（あざみ） 清さん（資生堂ジャパン株式会社 元統括部長）
南條 勉さん（合同会社ネクストワン 共同代表）
木村 昭さん（国立大学法人東京大学 社会連携本部渉外部門 シニアディレクター）
野田 浩一さん（いたばし総合ボランティアセンター 運営委員）

内容・成果・課題

ご登壇いただいたゲストはそれぞれバックグラウンドが異なり、様々な視点のストーリーを伝えることができました。

莇さんは一つの会社で定年まで勤め上げました。ボランティアのきっかけは 56 歳で管理職を離れるタイミングで、仕事関係者以外に知り合いがいないことに、不安や強い寂しさに襲われるようになりました。この寂しさを払拭する手段としてボランティアを始めました。そこでは幅広い年齢層の人たちが上下関係もなくひとつの活動を行うこと。お互いを尊重する姿勢がとても強いこと。その魅力に取りつかれた莇さんは、今では、30 以上の資格を取得、定年後は再雇用で仕事を続けながら、年に 70 日以上をボランティア活動に費やしています。

南條さんは外資 IT 企業を 50 歳で退職、在職中の 2008 年に調布市のちょうふチャリティーウォークの立ち上げに携わり、当時から現在も実行委員長を続けています。長く過ごした米国での寄付文化を見てきた彼は、日本に寄付文化を根付かせたいと考えています。そこで始めたのがファンドレイザー。まだ日本で馴染みがないため、先駆者として影響度を増していきたい思いで活動しています。人生 100 年、残りの 50 年は恩返しのつもりで社会に貢献したいと考えてます。

木村さんは 50 代後半まで大手商社で勤められ、その後会社方針による減給が避けれず、転職を決断。転職活動では、華々しい学歴、経歴に関わらず、エージェントから伝えられた自身の市場価値に愕然。

たまたま目にした東京大学でのファンドレイザーの仕事に猛勉強後に応募。転職に成功し、現在は多くのファンドレイザーと交流を重ねながら、日本最高学府での寄付活動に邁進しています。

野田さんは、子供のころからのボーイスカウトの経験から、今も地域活動で貢献されています。ボランティアという意識ではなく、世に役に立っていることに生き甲斐を見つけています。人は何かの役に立つことで心豊かに過ごすことができる。どんな年齢でも、地域貢献を行う喜びをひとりでも多くの人に知ってもらいたい。仕事は子供の学校教育が終わるまで。その後は地域活動、社会貢献に邁進したい考えの持ち主です。

ゲストの皆さんに共通することは、真に楽しみながら、そして充実した気持ちで活動をされていること。それが、皆さんの話し方から、参加者へとても伝わる時間となりました。ボランティアを始めようかどうしようかと迷われてる方への大きな後押しとなったことがアンケートのコメントより伺えました。「年齢は関係ない。いつから始めても構わない」、「何でも良いので、興味があれば、まず始めてみる」、「気軽に取り組む姿勢で良い。いつでも中断していいし、また戻ってきてやってもいい」、これら言葉が参加者を勇気づけるエールとなりました。

分科会の後半は、６人ごとに分けたグループでのワークショップを行いました。参加者それぞれが、仕事と家庭以外で、どんな活動をしているかを共有する時間となりました。ワークショップはグループごとに盛り上がりが異なり、また、全体発表への時間が充分ではなかったため、「充分な時間が欲しかった」や「もっと共有できる場としたかった」などのコメントをいただきました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 今年で 60 になります。仕事以外で生きがい、生きる場所を見つけねばと思い参加しました。アンテナはって探します。わくわくしてきました！
- ボランティアを凄い事と自分で壁を作っていた気がします。まずは簡単なことから楽しんでトライしたいと思います。
- 楽しかったです。違った地域の志を共にしている人と知り合うと勇気づけられます。
- ボランティアとは正義感の塊のような人達の集まりではないかと、恐怖感があったが、今日、そうではない、もっと気楽でフランクで楽しさを求める人達のつどいだと知りました。
- 難しく考えず、やってみよう！と思いました☺
- はじめの一歩を踏み出す貴重な機会となりました。
- ネットを使ったインタラクティブな取組みが面白かったです。 もう少し参加者同士でシェアできる時間があると良かったと思いました。

企画・運営

水田 征吾（調布市市民活動支援センター 運営委員）【主担当・報告書】
杉浦 由希子（NPO 法人両育わーるど）
村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）

０２　日本に難民？～難民支援から人権を考える～

開催目的

2017 年に日本で難民申請をした人は、19,623 人。そして、認定された人 20 人・・・。母国の紛争問題などで、命からがら逃げてきた人々が日本にもいます。しかし、その事実はほとんど知られていません。安住の地を求めて逃れてきたほとんどの人が、十分な支援を受けることも出来ず、中にはホームレスになる方や入国管理局の収容施設で生活を余儀なくされる方が多いのです。

難民というと遠い国で起きている出来事だと感じている方が多いのではないでしょうか？今の日本にも多くの難民の方がいるのです。違う国の問題だから関係ないではなく、同じ人として生まれた以上は誰でも安全で安心な暮らしを送れる権利はあるのではないでしょうか。

ここで、考えていきたいことは、難民についての現状を知ること。そして、日本の人権に関する問題です。日本国内でも子どもの貧困や虐待、ＬＧＢＴなど様々なことが表面化してきています。そのすべてが人権に関するものです。人権とは何か？についても、この分科会でみなさんと考えていきたいと思います。

開催日時

２月８日（金）１９:00 ～ 21:00

参加者数

21 名（参加者 15 名、出演者 １ 名、スタッフ３名、その他２名）

出演者

野津　美由紀さん（認定 NPO 法人難民支援協会　広報部チームリーダー）

内容・成果・課題

はじめに「なぜ難民について考える必要がありますか？」と問いかけられたあと、シリア内戦で壊滅したホムスの街の様子を見ました。シリアはもともと観光地でありとても美しい国でした。しかし、言論の自由はなく、政権に物申すと拘束され殺害されるケースもあります。

難民と言われる方は、定義上はいろいろありますが、一言でいうと内戦や人勧侵害から逃れ、自分の命を守るためにやむを得ない状況から故郷から逃れないといけなくなった人を言います。世界にいる難民の数は約 6,850 万人と言われています。

最初の問いかけに戻り「なぜ難民について考える必要がありますか？」それに対し、野津さんは「明確な答えはありませんが、私は難民も同じ人であり、人の命がかかっていることだから考えていかなければいけないと思っています。支援ができる状況にある国は、一人でも多くの方々を救っていかなくてはいけない責務があると思います」と話されました。

難民を保護するための３つのアプローチがあると言われています。一つ目は、難民が生まれない世界をつくること。しかし、これは簡単にできることではありません。二つ目は、周辺国に逃げている人を保護すること。三つ目の、平和で安全な国が一人でも多くの人を受け入れること。この点がとても大切です。

世界でも屈指の経済大国であり、他国と比べて安全な国である日本は、年間約 20 人の難民しか受け入れられていません。受入れについては他国に比べて圧倒的に少ない現状があります。この 20 人という数はあくまで認定された人のことをいうため申請している人はもっと多く 2017 年は 19,629 人の申

請者がいました。受入れのパーセンテージを他国と比較しても日本がどれだけ少ないかがよくわかります。現場で、年間 600 人から 700 人の方に対応しますが、保護する必要があると感じる方はとても多いのです。

難民申請するのはとてもハードルが高く、故郷から逃げてきた人自身が自国に帰るとどれだけ危険かを証明しなければなりません。申請する書類も日本語に翻訳して提出しなければなりません。そもそも命からがら逃げてきた人たちが、自身で証明するのは困難であり、その証明をするために母国にいる家族を危険にさらさなければならいこともあります。（事例をあげながら報告を受けた）

そもそもどうやって日本にやって来るのか。とにかく一番早く逃げられる状況ができた時点で母国を出てきます。日本へは観光ビザなどを取得してくる人がいますが、行った先に支援者がいることまでは考えずに出てくるケースが多く、日本にやってきたときには、とにかく何もわからずにやってきて、所持金も少ない状況と情報もないまま逃げてきます。そんな中、日本でサバイバル生活を送らなければなりません。難民支援協会に来る人のほとんどが、日本に支援者がいないまま来る人が多いのです。

日本では、難民申請中は、政府からの支援金を受けることができますが、支援金を得るにも審査に数ヶ月かかります。また、受給できる方も年間約 350 人であり、難民支援協会に相談に来る方だけでも年間 600 人～700 人いるので、その数の少なさがわかると思います。そして通常は、申請後 6 ヶ月すると就労許可がされますが、現在はより厳しくなり約 8 ヶ月以上かかることがあります。その間は自力で生活をしなければいけないため、ホームレスに生活を余儀なくされる方も多い現状があります。また、就労許可が得られても日本語が話せずに働けないなどのハンディキャップがあるため、難民支援協会でも日本語教室を行っています。そんな中、難民申請をしていても在留資格が無いために地域でも生活もできず収容施設に行く人も多いのです。その収容施設では、期限も決められておらず外との接触も制限されている状態の方もいます。

これらのことを見ていくと、国から逃れなくてはならないような人権侵害を受けて、命からがら逃げてきた人に対して、日本はその人を守れているのでしょうか。もしかしたら、日本に来てからもその人へ対しての別の人権侵害をしているのではないでしょうか。改めてみなさんに考えてほしいと思います。グループワークでは、感想も交えて人権についてフリートークを行いました。その中では、制度や国の体制を悲観するだけでなく、自分たちで出来るところから始めていくことも考えていきたいといった話しも出ました。一方、まだまだ難民の受入れについての理解が十分でない現実もあるため、多くの人に知ってもらう機会を増やしていきたいといった話し合いもされました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 難民について、ほとんど理解していなかったので、現状を知れたことはたいへん意義深かったです。難民受け入れ先進国に学ぶことも大きいかと思います。（特に語学教育等については）いろいろ地域で話し合ってまいります。
- ディスカッションの時間があり、そのトピックに関係する人の話（普段聞くことができない）を聞くことができました。インターネットで調べるだけでは知ることができない、難民の方の生活（日本に来てからの）を聞く事ができ、過酷さを実感しました。
- 「ただ批判をする」ではなく、「何ができるのか」と考えることが大切だと気づかされました。

企画・運営

宮崎 雅也（日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター）【主担当・報告書】
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）
神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
畑佐 憲（あらかわ子ども応援ネットワーク 事務局）

０３　ボランティア・市民活動センターは未来をひらく⁉

開催目的

　市民の参加や協働をすすめる場として、ボランティアセンターや市民活動センターが各地域に生まれ、地域や社会の課題解決をめざすための取り組みが行われています。しかし、「なぜ取り組むのか」「どのような未来をつくっていきたいのか」は共有されにくい現状です。センターがいまできること・すべきことはなにかを考えるために企画しました。

開催日時

２月８日（金）19:00～21:00

参加者数

48 名（参加者 39 名、出演者４名、スタッフ３名　その他２名）

出演者

安藤 雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー）
小林 由高さん（かながわ中間支援スタッフ協会）
上田 英司さん（狛江市市民活動支援センターこまえくぼ 1234 運営委員）
斉藤 あや子さん（狛江市市民活動支援センターこまえくぼ 1234 職員）

内容・成果・課題

【内容】これまで数々のセンター立ち上げに尽力した安藤さんをコーディネーターとしてお迎えし、中間支援組織の職員をインフォーマルな形でつなぐ小林さん、異動で今年度から市民活動支援センターに従事することになった斉藤さん、各中間支援組織の理事や運営委員として参画している上田さんの３名をパネラーとしてご登壇いただき、それぞれの視点でボランティア・市民活動センター（以降 VC）のこれまでを振り返り、参加者にはこれからのセンター運営について考えてもらう機会として実施しました。
成果：参加者の中には中間支援の職員だけではなく行政担当者も多く参加していました。公設民営の場合は特に当事者同士でありながら、設置者と運営者としてセクターを隔てる関係であり、この場でそれぞれの立場として議論を交わす時間がつくれたことは大きいと思います。また、アンケート結果を見て登壇者の次の意見が参加者に新たな気付きを得られたと感じたので記載します。
　「一般的に運営委員会は行政や運営団体からすると面倒な組織のうえ、デメリットと感じられることもあるかもしれません。しかし、市民活動センターは市民のものなので、そこに意見を言うことができる一つのチャンネルで、言わば市民の権利であると思います。メリット、デメリットというレベルのものではないのです。きちんと市民の意見が反映できるための仕組みですので、設置をしなくてはならないと思っています」
【課題】VC は多くの地域住民に、すそ野を広げるように市民社会の持つ可能性などを、理解してもらわなくてはならない。すべての地域住民がその価値に気付いた瞬間、創造が生まれるのではないでしょうか。そして、そこに従事するスタッフはどのようなミッションを帯びているのか。この場の短い時間では話しきれなかった部分が、まだまだ沢山あると思います。登壇者の方が仰っていた「VC スタッフという仕事は、就職活動をする大学生にイメージしてもらえるか？世の中で認知されているのか？そのこと自体を私たちが抱える課題に対する指標ととらえるべきではないでしょうか」。つまり、VC やそのスタ

ッフの存在や役割が知られていないということは、今までの取り組み方で本当に VC が未来を開けるのか？ということを問われているのだと思います。一見、成功しているかに見える事業に対しても、担当するスタッフ自ら懐疑的にとらえる必要があるのではないかと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 参加されている方々の「中間支援」への関わり方も、様々で面白かった（公益財団、CSW、大学ボランセン、医療生協など）。「早さの秘訣」という話が出た時のとらえ方のニュアンスの違いも、象徴的だと感じました。「中間支援」としての機能は「早くプロジェクトを進めるため」の機能ではなく、とても面倒で時間をかける「学び」「協働」としての機能だと思いました。
- 行政の立場として参加させていただきましたが、運営委員当事者の声、運営主体の職員の声をきけて、センター運営の参考になりました。市民ファンドの必要性を感じました。
- 運営委員会は市民の意見を反映するチャンネルであり、メリット、デメリットではなく権利だという言葉にハッとしました。

企画・運営

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当】
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）【報告書】
水田 征吾（調布市市民活動支援センター 運営委員）
相澤 若葉（東京ボランティア・市民活動センター）

０４　東京 2020 オリンピック・パラリンピックを一人ひとりのレガシーにするために

開催目的

来年開催の東京五輪に向けて、現地から中継したり取材しているマスメディアの方々を迎えて、オリンピックやパラリンピックの魅力や楽しみ方を知ることで、五輪のボランティア活動の参考にしながら五輪終了後に何が遺せるのか、オリンピック・パラリンピックレガシーについて考えてみる機会としました。

開催日時

２月８日（金）19:00～21:00

参加者数

35 名（参加者 29 名、出演者３名、スタッフ３名）

出演者

工藤 三郎さん（元ＮＨＫアナウンサー、オリンピック他スポーツ実況担当）
結城 和香子さん（読売新聞 編集委員）
枝見 太朗さん（一般財団法人富士福祉事業団）
鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］） 取材報告

内容・成果・課題

最初に、「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」の方に取材した内容を報告し、司会の枝見さんより、前回の東京五輪の様子が伝えられました。この時にパラリンピック実施で、枝見さんの財団がボランティアに関する窓口となりお父様等が尽力されたことが伝えられました。

続けて、元ＮＨＫアナウンサーの工藤さんからの報告です。「オリンピックは開会式が始まるまで何が起こるか分からない。開会式中でも何ヶ国が来て、選手も誰が来ているのかは、選手が入場して来て初めて分かる状態です。直前迄ドタバタなのです。それを楽しむ姿勢が大切なのです」と心構えからスタートして場が和みながら話が続きます。今迄のオリンピック実況の体験から感じたことをストレートに分かり易く伝えて下さいました。「日本のメディアは朝から夜までニュース等で何度もオリ・パラの報道をしますが、殆ど日本人の結果で、しかもメダル獲得数のこと、だから皆さんの中には世界記録と日本人の記録しか記憶されていない」と広い視野でオリ・パラを観て、色々感じてみる大切さを伝えてくれました。ボランティアとしての心構えとして「アトランタでの体験。カール・ルイスが金メダルを獲得して、その表彰式の時に、競技場の外にいた年輩のボランティアの方が、国歌を聴きながら直立不動の姿勢でいた姿を見ました。世界記録も表彰の様子も見られないけれど、自分も一緒に参加しているという意識が感じられました。『イベントを支える』立場と考えるよりも、『それぞれが大事なポジションであり主体的に行動出来ることが重要』、そして行動を続けて行くためには、様々なことに繋がっていなければならない。“のりしろ”が大切で、そういう心はボランティアをされている皆さんこそ積極的に展開して欲しい」との勇気づけを頂きました。また、「ボランティアだからこそ」の良さとして、レースで結果が出なかった選手へのインタビューのことを取り上げて、「自分達はその選手の取材をして来ましたし、思いも有ります。踏み込んだ質問が出来ないでいたのですが、或る国で選手への

インタビューを担当されたボランティアの方が『失敗の原因は何ですか？』とストレートに聞いていました。それを見ていて“ニュートラル”な立場の人の存在が大切なのだと改めて思いました」。

パラリンピック関係は読売新聞の結城さん。本来はオリンピックの取材が中心なのですが、急遽お願いしたにも関わらず、パラリピアンを取材した内容などを伝えて頂きました。「『障害』って何だと思う？多くの選手は、何度も葛藤して、自分が駄目だと思っている。そして心を病む。ヨーロッパなどは、障害者の方が使えないと云う施設に対しては『施設に障害がある』と云う認識。日本では金メダルのパラリピアンの練習会場がなかなか確保出来ない程施設の面で凄く遅れている。また、メンタル面での一般の方々の認識が浅く『何故そこまでやるの？』と云う声が多い。『折角頑張っているのだから』は、スポーツとして見られていない証でもある。ロンドンパラリンピックで、報道が大きく変わり、『選手たちは国民の英雄。子ども達の憧れ』となった。それは『障害有無では無く、能力、そのカッコ良さを見ること』で、同情では無くて選手の資質が正当に評価されて、生き方への感銘に繋がった」と話します。その結果として、パラリンピックは観ていて大変面白く、ロンドンでは予選会から連日満員ＳＯＬＤ OUT とのこと。「多くの人に共感を得る競技であると思います。オリンピック・パラリンピックレガシーとは、『意識や自信の集約』であり、どういう風に自分を見るか、を確認出来て今後の活動に大きく影響するもの」とまとめて下さいました。今回の分科会では、選手や運営側では無く身近に五輪を観て来られたマスメディアの方々からのコメントで東京オリンピック・パラリンピックの意義を感じ、意識を高めようと思い企画しました。それを上回る有意義な内容になったと思います。しかし、前年度に申込みが普通で有ったため、ターゲット層の想定ミスか、オリ・パラボランティア募集終了後でこの様な内容に対して関心度が下がっていたのか、内容が良かった分、広報、動員面の改善が必要だったと思われました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- スポーツが好き、観る側、ボランティアとして支える側、それぞれの立場で楽しんで、自分の人生に活かしていくという思いが伝わってきました。
- オリンピック・パラリンピックに向けてのボランティアの心の持ち方等が、とても参考になりました。
- パラリンピックのＴＶでは見えない知ることが出来ない選手たちの物語、パラリンピック自体の意義を知ることが出来ました。
- 自分ならではのボランティアを創り出すという考え方が新鮮でした。また、パラリンピックならではの特長は、一般的な講演会ではなかなか焦点が当てられないため私の持つ偏見を変えられてとても興味深かったです。
- オリ・パラの楽しみ方について、メダルの数とかに目がいきがちですが、実際にマスコミ関係の方のお話をきき、視点によって見方、伝え方、全体がかわってくるように感じました。

企画・運営

鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）【主担当・報告書】
枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団） 司会・進行
神保 彩乃（首都大学東京 ３年）
芦澤 弘子（聖学院大学 ボランティア活動支援センター）
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター） コーディネート

０５　ーすべての子どもが輝ける未来へー
子どもの性同一性障害

開催目的

　ＬＧＢＴに関して少しずつ理解が深まってきましたが、その中でも少数派である性同一性障害の当事者は、子どもの頃から自分の性への違和感を感じながらも誰にも相談できないことで生きづらさを感じていたのではないかと考えます。そこでこの分科会では、そうした子どもたちに寄り添うためにまずは「知ること」から始めようと考え企画しました。これはすべての子どもが輝くために、生き方の多様性を考えることだと思います。

開催日時

２月９日（土）10:00～12:30

参加者数

25 名（参加者 15 名、出演者４名、ボランティア２名、スタッフ４名）

出演者

西野 明樹さん（一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会 代表理事）
阿部 和広さん（公益財団法人社会教育協会 日野社会教育センター 副館長）
上野 郁美さん（フリーライター 「あすへの一歩プロジェクト」 代表）
当事者（成人）I さん

内容・成果・課題

【内容】
１．グループワーク
　まず始めに、西野さんの紹介とともに「自分の性別な何か。西野の性別は何か。どうしてそのように思うのか」一人ひとり考え、グループごとに話しあい発表しました。自分の性別を考えるときには戸籍や、内面的な特徴を挙げる方が多かったのですが、西野さんの性別を考えた時、見た目（身体的特徴）を挙げる方が多いのが印象的でした。その後、性同一性障害とは、「自分の性別に対して反対の性になりたいのでなく、心と体に一貫性がなく性の不一致があるがために、出生時の性別のままでは日常社会生活に重大な生きづらさがある人、その状態であること」とお聞きしました。
２．出演者から
　上野さんのファシリテーターにより、出演者の方々からお話ししていただきました。

　阿部さんは、子ども向けに自然体験活動を企画・運営をしており、ボランティア（キャンプリーダー）の方々と障害あるなし関わらず活動を行っています。宿泊は伴う活動でもあるため、過去に例があったかどうかなどお聞きしました。参加している子に個別の課題があるときは、親子や関係する方々と話し合うことを大切にしているということや、大学生などのボランティアと関わる中で最近気にな

ることとして、似ている趣味趣向の人たちが集まりやすく関係が深まる一方で、異なった考え方は受け入れにくく、効率を優先することで違う考えを排除する傾向が強くなっていると感じているということでした。

Ｉさんは、七五三や家族で撮った写真を紹介しながら、幼少期の話をしてくれました。親や周りの大人の期待を感じ「～らしさ」を求められると憮然としていたそうです。同じ集団にいるときには「通じ合わない息苦しさ」も感じていたそうです。家や学校ではない場があり、そこで「自分とよく似た雰囲気の人」と出会った経験は安心感があることだったと振り返り、人として当たり前の気遣いをしてくれる友だちや、大人に出会い、「人が好きな自分でいられた」とおっしゃっていました。

３．質問

「学校や集団生活でどのような配慮が必要か？」という質問に答えていただき、必要な配慮はその時、その人によっても違うということ、先走りした配慮でなく、対話が大切であることなど話しが出ました。

【成果と課題】

反対の性別で対応することで、かえって当事者が目立ってしまうという例をお聞きし、「第３の選択肢で落としどころを見つけていきたい」との話に納得しました。そしてゆるやかな配慮が当たり前となる社会をつくっていきたいと思いました。「一人の人間として生きていく。私たちの居場所ある社会になってほしい」の言葉が印象的でした。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 当事者の体験話は、あっという間に時間が過ぎてしまうくらい聞き入ってしまいました。いい意味でたくさんモヤモヤした分科会でした。「こうすれば！」という対応はなく、対話を通してひとりひとりに寄りそった関わりをしていくことが大切であると分科会を通して感じました。
- 性同一性障害や性自認に違和感をあるということを、「逆の性別になりたい」事だと思っていたけど、そうではなく、やりたくないこと、できないこと、思いには個人差があるという当たり前のことに、改めて気づかされました。全てはやはり、当事者の声をきくこと、からだなあと思いました。そして、西野さんはじめ、お二人の声がきけたことがすごく良かったです。同じ障害に悩みながら全然タイプの違うお二人のお話でより深く考えられました。お二人の子ども時代をきいていて、本当に涙が出そうでした。でも大人になったお二人のお話をおうかがいできて、大人になるって素敵なことだと思えました。私も大人として、生きづらい子ども達や人達と一緒に考えていきたいです。
- 性同一性障害はじめ、さまざまな困難を持った人への対応は“正解”を先回りして提示するのではなく、当事者の思いにあわせて、個別に対応を考えていくというメッセージが伝わってきました。ありがとうございました。

企画・運営

栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター）【主担当・報告書】
神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
杉浦 由希子（NPO 法人両育わーるど）
畑佐 憲（あらかわ子ども応援ネットワーク 事務局）

０６　多様に広がる地域の居場所

開催目的

　地域の中で、自宅・会社・学校でもない「第３の居場所」がつくられ、広がっています。なぜいま、地域の中でこの取り組みが広がっているのでしょうか。また、このような場がもっと広がるためには、何が必要なのでしょうか。素敵な居場所をつくる“しかけ”をお聞きしながら「こんな居場所があったらいいな」を考える場として開催しました。また、地域の中に自分の居場所がほしい、つくりたい方や居場所づくりへの参加に関心のある方・グループを対象として今後のネットワークづくりに役立てることを目的としました。

開催日時

２月９日（土）10:00～12:30

参加者数

32 名（参加者 26 名、出演者２名、ボランティア１名、スタッフ３名）

出演者

海野 真幸さん（NPO 法人自然工房めばえ 理事長）
森 祐美子さん（NPO 法人こまちぷらす 代表／理事長）

内容・成果・課題

【内容】
１．NPO 法人自然工房めばえ（東京都練馬区）　理事長　海野　真幸さんからのお話し
　海野さんが「自然工房めばえ」を作るきっかけとなったのが、ご家族の体調不良とご自身の子育てが重なったときに出合った園芸療法でした。練馬区で空き家事業の話が上がっていたので、みどりのまちづくりセンターに相談しにいったのが空き家事業のはじまりです。まちセンが伴走し、区役所と大家さんの間に入り、様々な困難を乗り越えました。めばえる cafe+は、オープンハウス・コミュニティーカフェとして地域の皆さんが気軽に集う居場所づくりをしています。場があることによる効果も見出しながら、ただの場だけではないヒト・モノ・コトによる地域資源を活用した居場所作りとして展開しています。
２．NPO 法人こまちぷらす（横浜市戸塚区）代表／理事長　森　祐美子さんからのお話し
　こまちぷらすは「子育てをまちでプラスに」を合言葉に、子育てが「まちの力」で豊かになる社会を目指し、活動しています。活動のきっかけは、ご自身の子育て。ママ友６人で立ち上げましたが、資金はゼロからのスタート。情報スペースの運営、カフェの運営、つながり事業など企業からの助成を受け資金を作っています。スタッフとのコミュニケーションがおろそかになり、一度組織崩壊しましたが、どんな場所を作りたいのかとか、何のために作ってきたのかということをスタッフへ伝えていることが必要だと学びます。毎月、動画でビジョンの共有をし、新たなチャレンジをし続けています。

３．自由交流タイム

東京都練馬区大泉学園町にある就労継続支援Ｂ型「つくりっこの家」で販売しているクッキーをお茶のお供にお配りし、自己紹介の為に記入していただいた４つの窓（名前、ご所属、住んでいる・活動している地域、「地域の居場所」に欠かせないモノは？）をきっかけに自由にお話をしていただきました。出演者も加わり、お菓子を食べながらなごやかな雰囲気で行えました。また、青森や山形など全国から、様々な立場の方々が参加されていたため、良い交流の場となりました。

【成果と課題】

出演者の方々の具体的な課題は、居場所づくりの活動を既にされている方にとっては、出演者の方々が抱えていた悩みにどう向き合い、解決したのかなどこれからの活動のヒントとなりました。

中間支援組織の方にとっては、活動していく上で団体さんが抱える課題を中間支援としてどう支援できるのか考える場となりました。また、活動する方・支援する方がつながるネットワークづくりの必要性が感じられました。

今後、「地域の居場所づくり」の活動のネットワークをつくるにあたり、ネットワークをどこまで広げるか、どのようにつなげるか様々な課題がみえてきました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ２人の現在までの道のりに学ばれた事、重要な考え方、人が集うための柱となる方針等、大変勉強になりました。
- 60 歳前にこれからボランティア、地域活動に参考にしたいと思っているところです。たいへん参考になりました。
- 自分の住んでいる地域ではン見られないような活動を知ることができ勉強になりました。おかしや飲み物もあり、なごやかなふんいきでした。具体的に場所のとり方や費用のことなど具体的に聞けて良かったです。
- 地域によって居場所の形がちがうということがよく分かりました。活動のヒントを頂きました。
- ゲストお２人への質問時間がなく、パネルディスカッション形式で参加者の活動なども聞けるようなやり方がよかったと思います。
- 団体を支援するヒントが得られました。また、同じグループの交流会でも、今後の事業の参考にできるヒントが得られて良かったです。ありがとうございました。
- 実際に活動している NPO の方のお話から団体運営の実践的なトライアンドエラーなど挙げていただき考えさせられました。
- 事業展開する上で居場所作りの大切さを改めて学ばせさせていただきました。身近な問題や地域的課題を考え、必要であると感じました。園芸療法、カフェ居場所作りに活用したいと思います。

企画・運営

熊谷 紀良（東京ボランティア市民活動センター）【主担当・報告書】
朝比奈 ゆり（東京ボランティア市民活動センター）
西山 はな（東京ボランティア市民活動センター）

０７　福祉の最先端はここまで来ている！～「超福祉」の視点から最新の福祉のテクノロジーやデザインの動向を学ぼう～

開催目的

最近では、思わず誰でも使ってみたくなるテクノロジーやデザインなど、「福祉」に対する心のバリアを除くため、従来の福祉の視点では想像つかないような新しい動きが生まれています。それらを活用した最新事例を紹介しながら、実際の活動現場にどう応用できるのかを考えます。

開催日時

２月９日（土）10:00～12:30

参加者数

28 名（参加者 22 名、出演者 １ 名、ボランティア１名、スタッフ４名）

出演者

田中　真宏さん
（NPO 法人ピープルデザイン研究所　ディレクター/有限会社ネクスタイドエボリューション　執行役員）

内容・成果・課題

1）ピープルデザインとは

ピープルデザインとは、〝心のバリアフリー〟をクリエイティブに実現する思想・方法論のことです。今の日本社会では、物理的なバリアはなくなってきているものの、まだまだ健常者と障害者が〝わかれて〟います。私たちが目指しているのは、障害者もおしゃれをしながら普通に街に出てきて、特別なサービスが提供されなくても、街の中にいる人たちが声を掛け合い、健常者が手伝うことが当たり前の、自然な混ざり合いの社会です。

2）超福祉展

「超福祉展」は、渋谷ヒカリエをメインな会場に、「障害者／高齢者（認知症）／外国人（居住・来街）／LGBT／子育て」をはじめとする、様々なマイノリティや福祉そのものに対する「心のバリア」を取り除こうと、2014 年より毎年開催しているイベントです。2020 年に実現したいダイバーシティ（多様性に寛容）な街の姿を、渋谷から日本や世界へ発信することをねらいとしています。

内容は大きく展示・シンポジウム・体験イベントに分かれています。展示は毎年約 20 の企業や団体が参加し、思わず「カッコイイ」「カワイイ」と使ってみたくなるデザイン、大きなイノベーションを期待させてくれる「ヤバイ」テクノロジーを備えたプロダクトをセレクトして展示しています。シンポジウムは、毎日日替わりで、従来の福祉の枠に収まらない魅力的なプレゼンターが登壇しています。体験イベントは、期間中渋谷の街中で同時多発的にイベントを行い、ハチ公前ではタップダンスの音を振動と光で伝える機器を使って、聴覚障害の方も一緒に楽しめるイベントなどを行いました。

3）就労体験

障害者の人たちが働くと言えば、従来は福祉作業所内での内職作業が主でしたが、私たちの就労体験では、外に出てワクワクするような楽しい、晴れの舞台で働いてもらうことで、普段のサービスを受ける側から、「ありがとう」といわれるサービスを提供する側に回ってもらい、一般のスタッフと一緒に働いてもらっています。

Ｊリーグの川崎フロンターレでは、すべてのホームゲームで多い時は 20 人の障害者が働いています。普段は家と事業所の往復でも、２万５千人を収容す

るスタジアムに来ると、障害者の方も働くモチベーションが上がります。開場前は座席清掃など、開場後からキックオフまではチラシ配りなどをしてもらっています。来場者に障害のある方を働いている姿を見せ、知って慣れてもらうことで、双方の〝心のバリア〟をフリーにしていきます。試合開始になると業務は終了で、交通費と観戦チケットをもらい、４千円相当の報酬になっています。今では、Ｂリーグやロックフェス、ハロウィンイベントにも広がって川崎市内だけで年間約 800 人が参加しています。また、障害者だけでなく、ひきこもりやホームレスの方にも働いてもらっています。

4）コミュニケーションチャーム

「マタニティマーク」から発想を得て作成したもので、「困った人がいたら、私がお手伝いします」という意思を持った側の人につけていただく、ファッションアクセサリーです。デザイン性を重視してはい・いいえ・電車・トイレなどのアイコンを落とし込んで、外国人の方や聾唖の方とも指さしで会話できるようになっています。また、この製作作業は福祉事業所に依頼しており、障害者の方々の工賃アップに貢献しています。

5）質疑応答

Q）就労体験の当事者募集のしかたはどうやっていますか？

川崎市と協働で実施しています。NPO が就労体験の機会を設定し、それを市が市内の福祉作業所などに知らせて、イベントごとに人数を取りまとめてもらっています。この取りまとめなどの事務作業はとても大変で、これだけの規模で展開できているのは、川崎市健康福祉局の職員さんのおかげです。

Q）普通の企業がマイノリティの人たちに就労機会を提供するにはどういうやり方がありますか？

企業側ではそんなにかまえず、できそうな仕事を切り出して、まずはやってみるとよいと思います。一言で障害といっても、障害の種類はもちろん、年齢・性別・性格・趣味など私たち同様に、には百人百通りあります。これというやり方は存在しないと考えていますので、まずは Do からはじめて、そのあと Check して、Plan を立て直し、また Action を起こしてみる、というサイクルが良いと思います。

Q）「超福祉展」をほかの地域に展開する予定がありますか？

超福祉展には地方行政・省庁・議員の方の視察も多く、地方で開催したいとよく言われますが、その地域にあった形でコンセプトなどがしっかり伝わるようにやらないと意味がないと思っています。2020 年の最終回に向けて、地方でも展開できる「超福祉展」のモデルを構築していきたいと考えています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ピープルデザインという考え方を始めて知り、子供たちが超福祉展で興味をもつところから、その子供が大人になってとつづいていけば、超福祉が当たり前になっていくのかなとわくわくしました。
- 介護の仕事をしていのたですが、会場の方が仰っていたように福祉用具に抵抗を持つ方がたくさんいらっしゃいます。少しでもプラスに感じるわくわくするデザインが普及してほしいと思いました。
- とても興味深い内容でした。60 歳を前に身体的な衰えを感じてもいましたが、「楽しめる生活が待っているんだ」と思えれば、変化していく自分の身体も受け入れられると思いました。

企画・運営

市川 徹（株式会社世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【主担当・報告書】
白井 長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）
神保 彩乃（首都大学東京 ３年）
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）

０８　海にあふれるプラスチック
～生活ごみからマイクロプラスチックまで～

開催目的

マイクロプラスチックは、海洋生物に悪影響を与える海洋ゴミの中でも、最も深刻なものの一つです。ヨーロッパでは、使い捨てプラスチックを全面禁止にする方向になってきました。この分科会では、海洋ゴミ、特に、マイクロプラスチックがもたらしている海洋汚染の現状について学び、私たちができることについて考えます。

開催日時

２月９日（土）10:00～12:30

参加者数

18 名（参加者 11 名、出演者２名、スタッフ５名）

出演者

小島　あずささん（一般社団法人 JEAN）
吉野　美子さん（一般社団法人 JEAN）

内容・成果・課題

1.小島さんのお話

海洋ごみは古くて新しい問題です。昔からごみは発生していましたが、天然素材がほとんどで、量も多くはありませんでした。現在は、プラスチック製品を大量に使い捨てるようなり、清掃だけでは対応が不能になっています。海のごみ問題＝プラスチックによる海洋汚染です。

プラスチックは優秀な素材ゆえに、約 100 年の間に広がりました。しかし、長所が困った問題を引き起こします。分解しないので、ずっと残ります。また、軽くて移動しやすく、拾えない場所にも流れつき、国や地域を越えて移動するのです。生物が誤飲したり、絡まってしまったりすることもあります。

世界全体のプラスチックの生産量は年約４億トンで、うち半分は容器包装等使い捨てです。日本では、2012 年に一人年間約 75kg を使っています。レジ袋は年 305 億枚、ペットボトルは 09 年 500ml 換算で 225 億本。使い捨て容器包装の使用量は一人 32kg で、米国に次ぐ第２位です。

プラスチックには、石油から作られた合成樹脂と、天然樹脂があります。植物を原料としたセルロイドは 1870 年に生まれ、石油由来のものは 1907 年に誕生しました。70 年代末には、包装資材の紙袋とポリ袋のシェアが逆転。ゴミが増えたため、過剰包装追放や美化運動が各地で活発になりました。便利だからとどんどん使い始めた頃の 69 年にはハワイ諸島で、海鳥のヒナのプラスチック誤飲が確認されています。

このようなことを背景に米国の NGO が国際海岸クリーンアップ（ICC）を始めました。86 年から始まり、89 年くらいから世界に広がっています。2017 年には、107 の国と地域から約 79 万人のボランティアが参加しました。ICC の誕生によって、「拾ってきれいに」から「調べて出さない」に転換されたのです。ICC を 1990 年に日本で行ったことをきっかけに、91 年 JEAN が誕生しました。

海ごみは、海辺での置き捨て、船から、貨物・港湾作業・漁業等の資材の流出、不法投棄等により生まれます。路上のごみが川を通って流れたり、ごみ置き場から意図せず散乱したりすることもあります。

新たな海洋汚染として、5mm 以下のマイクロプラスチック（以下 MP）が注目されています。1mm 以下の初めから小さく作られた一次的 MP と、劣化・破片化して微細化した二次的 MP があります。一

次的 MP は、洗顔料などのスクラブ剤などとして初めから入れているものなので、入れないことで防ぐことができます。米国では 2015 年にオバマ大統領が入れること、次に売ることの二段階の法的な規制をしました。多くの国で法的な規制をしていますが、日本では企業の自主的な努力に委ねられています。二次的 MP は、対策が非常に難しく、これまでに環境中に出てしまったものが劣化した微細片なので、全てを回収することはきません。今排出が止まったとしても、すでに出てしまったものの劣化は進むので、これからも増えていきます。小さくなれば、体の小さな生物も摂り込みます。また、そこに有害物質が付着していると、生物の脂肪等に移行します。そして、食物連鎖を通じて、濃縮され移行するのです。食物連鎖の頂点は人間ですが、現段階では健康被害を心配する必要はないようです。しかし、未来を考えれば何とかしなければならないと思います。

多くの課題があります。海ごみはいろいろなものが混ざっているので、リサイクルが難しく、埋め立てか焼却になります。漁業者は困っていると言いたいのですが、風評被害が怖く自ら言うのは難しいのです。4～5 年前からマイクロプラスチックの研究が盛んになりましたが、現場に活かすのはこれからです。また、抑制対策は善意に頼ることしかありませんし、現場では、一体いつまで拾ったらいいのかと疲れてきました。なお、JEAN のように全国規模で活動する NGO への公的支援はほとんどありません。

しかし、幸いなことに少しずつ認識が変わってきました。15 年ドイツのエルマウサミットで、海洋のプラスチックごみが世界的課題であることが明記され、昨年のカナダのシャルルボアサミットで、「海洋プラスチック憲章」が提案されました。しかし、日米は署名していません。批判が多かったからか、環境省は「プラスチック資源循環戦略」を策定します。30 年までに使い捨てプラスチック排出量の 25%削減、東京五輪までにレジ袋有料化を目指すこと等が盛り込まれました。

経済界では、16 年のダボス会議で、毎年少なくとも 800 万トンのプラスチックが海に流出していることが報告されました。このままでは、50 年に重量ベースで魚の量よりも多くなってしまうかもしれません。なお、今年 1 月に日米欧の企業中心に 29 社で「プラスチックごみをなくすための連合」が設立されました。

私たちにできることは、現実を知り、当事者意識を持つことです。今あるごみをどうするか、増やさないためにどうするかの二つがあります。回収の促進、また、発生抑制と普及啓発・環境教育。一人ひとりの行動の変化が重要であるとともに、社会の仕組みの変革が必要です。

2.グループワーク「私の一日とプラスチック」

まず、個人ワークとして、参加者それぞれが 1 日の中で、どんな場面で、どんなプラスチック製品を使っているか、また、それは使い捨てかどうかを書き出しました。次に、4 つのグループで共有した上で、使い捨てのプラスチックを取りあげ、使い方を変えることや材質を変えることが可能か等の代替案を考え、その課題・問題点を挙げました。そして、グループごとに全体に対して発表をしました。

今回は、プラスチックを直ちに止めようということではなく、プラスチックの特徴やいかに便利に使っているかを知りました。その中で、可能な範囲でできそうなことが見出せたのではないでしょうか。最後に、参加者一人ひとりが付箋に今日から実践する決意表明を書いて終了しました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 歴史などの流れもふまえて、プラスチック問題についてうかがうことができ大変勉強になりました。ワークショップ形式で考えながら学ぶことができました。
- 「海洋ゴミ問題」はニュースで知っていましたが、内情までは良くわかりませんでした。今回のお話を伺って、深刻な問題であることがわかりました。国もどのように動いていくのか注視したいと思います。

企画・運営

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）【主担当・報告書】

０９　映画『いのちの深呼吸』上映会&
『生と死の体験』ワークショップ

開催目的

平成 30 年の自殺者数は 20,595 人で、平成 22 年以降、９年連続減少しています。国の対策としても自殺対策は進んでいますが、まだまだ「触れてはいけない」「自己責任」といった風潮はぬぐえません。しかし、日々の生活の中でのコミュニケーションや対話によって、大切な人の変化に気付き、声をかけ、話しを聴き、必要な機関につなぎ・見守ることが、大切な人の自殺を防ぐ鍵となります。まずは「ゲートキーパー」という役割や存在を知ってもらい、「自殺防止」について、一人ひとりが出来ることを考える機会を持っていただきたいと思い企画しました。

開催日時

２月９日（土）10:00～12:30

参加者数

26 名（参加者 21 名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

大小原 利信さん（NPO 法人日本ゲートキーパー協会）
講師プロフィール：
「味方になりきるコミュニケーション」をキーワードに、ゲートキーパー養成講座や講演会、また福島県飯舘村での傾聴活動を行っています。近年は群馬県と新潟県を中心に、小学生～大学生に向けた出前授業「ゲートキーパー検定」に力をいれています。

内容・成果・課題

分科会は２部構成でおこないました。自殺対策に関わる映画の視聴と、生と死にまつわるワークショップを通して、参加者みんなで感じたことを共有しました。

まずは、ドキュメンタリー映画『いのちの深呼吸』の上映です。内容は、希死念慮者（自殺をしたいと思っている人）に寄り添い続ける僧侶の日常を捉えたものです。「死にたい」と思う人々の苦しみや残された人々の思い、支援する僧侶葛藤。「自殺」という社会問題を通じて、生きることや自分らしさに向き合える作品でした。この作品をご存知で、観ることを楽しみに、ご参加くださったかたもいらっしゃいました。

後半は、劇中で登場した「旅立ち」というワークショップをアレンジし、みんなで体験しました。３枚の付箋それぞれに大切な人の名前を書いていただき、その方に思いを馳せながら順番に一枚ずつ、丸めて捨てていきます。全てが無くなった（捨てた）時、それが「死」を意味します。「辛くなったらやめてもよい」というルールのもと行いましたが、みなさん真摯にご自身のお気持ちと向き合ってくださいました。

「死」を体験した後は、「死にたいくらい辛い」人が、どんな気持ちでいるかを、体感するために“手のワーク”を体験しました。二人組になって、胸の前で組んだ指を相手に指示される通りに上げるという、簡単な動作です。この簡単な動作が、少し条件を加えることで難しくなります。頭でわかっていても、身体が言うことをきかないのです。簡単にできるはずの動作が、思うようにできません。その時に、どんな気持ちになるか、どんな声を掛けられたら嬉しいか、大小原さんのカウンセリングを通しての経験を含めてお話しいただきました。「死にたいくらい辛いんだね」と、自分の価値観は脇において、その気持ちに寄り添っていく大切さを実感できたと思います。

最後に、参加者からたくさんの質問がありました。「実際に身近に心配な方がいる。どのように声を掛けたらいいか」「自身もゲートキーパー活動をしているが、自分が疲れているときもありどうしていいかわからなかった。どうしているか」等、具体的な対応についての質問があり、参加者の関心の高さがうかがえました。

また、自殺対策は専門家以外が触れてはいけない特別なことではなく、暮らしの中で私たち一人ひとりが「できることをできる範囲で」関わることで、貢献できるということを感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 映画もあとの話も、今までなかなか聞けなかった話で、とても学びになりました。今できることをしてみたいです。
- とても良い上映会でした。相談者にむきあっている姿。感動しました。
- 葛藤を抱えながらも、つながりを持ち続けることに意味を感じました。
- 大事な人を３人あげて、１人ずつの思い出を思い出す過程で、初めて気づけた愛情があっておどろきました。
- 名前を言って挨拶をする。電話をしてくれてありがとう、また電話くださいね。は勉強になりました。

企画・運営

森本 美花（NPO 法人日本ゲートキーパー協会）【主担当・報告書】
村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）
鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）

１０　阿波おどり大解剖！～地域をつなぐ要素を探る～

開催目的

阿波おどりは老若男女が連と呼ばれるグループで集い、同じ目標に向かい活動しています。現在、日本各地に数えきれないほどの連が存在し、夏を中心に季節を問わず、大小いたるところで開催されています。これほどまでに広まった背景は何か？さらに、連の人たちは多世代での交流であるうえ、絆も強い傾向です。コミュニティ形成、多世代交流、そして、まちづくりに関するヒントがたくさん隠れていると思われます。ゲストは NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会事務局長の冨澤さんをお迎えし、これまでの取り組みなどをお話しいただきました。阿波おどりという切り口で、中間支援者を主な対象とした参加者それぞれの視点で、連とまちの関係、そしてお祭りを支える様々な人たちを結ぶ協会の役割などを掘り下げる調査の機会として、また、ヒヤリング等を行うことで、自身の活動に生かすための企画として設けました。

開催日時

２月９日（日）10:00～15:30

参加者数

48 名（参加者９名、出演者１名、飛鳥連 35 名、スタッフ３名、）

出演者

冨澤　武幸さん（NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会　専務理事・事務局長）
飛鳥連（高円寺阿波おどり振興協会所属）

内容・成果・課題

【内容】

事務局長の冨澤さんをお迎えし、前半は、高円寺における阿波おどりの歴史や、まちの発展のためのユニークな取り組み、阿波おどりが発展する過程で発生した課題をどのように乗り越えてきたかのお話や、おまつりを支える商店街や地元小学生をはじめとした地域の方々、他の地域から来た大学生ボランティアなどのお話を伺いました。その後移動し、高円寺の街歩きをしながら、高円寺阿波おどりから派生した演芸まつり会場へ移動。演芸まつりのご紹介と見学を経て、後半（昼休憩後）は、飛鳥連さんの見学と体験、そしてヒヤリング調査を行いました。

【成果】

事務局長の冨澤さんがこれまでどのように課題を乗り越えてきたか、地域の人たちからどのように理解を得て巻き込んできたか、まちの発展にどのような関与をしてきたか等々、様々なお話を伺いました。そのなかで大学生ボランティアの存在が大きいという発見があり、また、冨澤さんとボランティアや商店街の人たちを含めた、おまつりを支える様々な人たちとのフラットな関係性についても伺いました。関係性で重要な要素だと感じたのは、冨澤さんご自身がおっしゃった「お互いにリスペクトしあえる関

係」であり、その関係が構築され横のつながりが生まれ土台となって、本場徳島をもしのぐ２日間で 100 万人を超える巨大な、おまつりに発展したのではないかと推測します。（冨澤さんは観客数を伸びるよりも、地域の皆さんに愛されるおまつりを目指しているとおっしゃっておりました）また、現在のおどり連の連員構成は他の地域からの受け入れが多いということを伺いました。移動手段、情報発信や取得が多様な現代では、他の地域から人が集まりやすい環境になっています。無理に同じ地域にこだわらないグループ構成も、コミュニティ形成のうえで、一つの要素としてとらえるべきなのかと感じました。またグループの中の絆が非常に強い関係性であることも改めて知り、一つの目標に向かって直向きに努力する姿を見せあうことが、お互いにリスペクトしあえるキッカケになったのではないかと感じています。この結果、連の中のコミュニティは、かなりフラットな関係であるのだと推測します。このリスペクトし合える関係はコミュニティの形成をするうえで改めて必要不可欠な要素だと認識できました。

【課題】

支援者としてこの要素をどのような形で実施事業に反映するかは具体的な言葉として、現状では思いついてはいないことが唯一の課題であると思います。一方でコミュニティを作ることを目的(ゴール)に描く支援の在り方では、すぐに限界が生じたり、コミュニティ形成に無理があったりするのではないかと思われます。多世代交流、世代の循環からなる継続ということも視野に入れると、私たち中間支援者のコミュニティ形成支援の在り方が問われているのではないかと感じます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 地元のコミュニティ活動？といういうものにどう役立てばよいのか、一つのきっかけとなりました。
- 阿波踊りを実際見たり体験でき、飛鳥連のみなさんの思いや様子をしることができて良かったです。
- どのように地域に根差してきたのかを知ることができておもしろかったです。まちそのもののウェルカムな感じが歴史とのまちの成り立ちからもあるのだと思いました。

企画・運営

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）【主担当・報告書】
佐藤 優衣（駒澤大学 ３年）
阿部 宏大（東京ボランティア・市民活動センター）

１１　連続かつ広域な自然災害の時代に
～報道されない被災地のいま～

開催目的

毎年のように自然災害が発生していますが、2018 年は大きな災害が連続かつ広域に発生しました。各被災地に支援は集まるものの、マスメディアの影響も大きく、偏りもありました。また、被災地から離れた地域から支援を行う場合、的確な情報を得て、地域に発信し、いかに偏りのない支援につなげることが出来るのか、とても難しいと感じました。この分科会では、被災地の現状を知ることで、偏りのない支援を行うために何ができるのか、それを考えることで自分たちの地域が被災した際に何が必要になるのか、一緒に考えたいとの思いで企画しました。

開催日時

２月９日（土）14:00～16:30

参加者数

24 名（参加者 19 名、出演者２名、スタッフ３名）

出演者

明城 徹也さん（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク 事務局長）
小林 深吾さん（一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター プログラムオフィサー）

内容・成果・課題

明城さんからは、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(以下 JVOAD)の役割と 2018 年に被災した地域を中心に、被災地の現状をお話しいただきました。

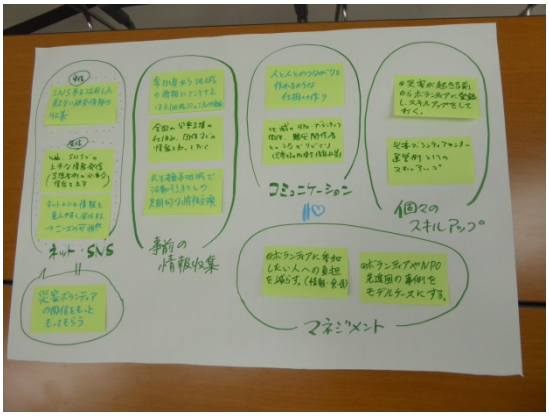
JVOAD は、災害時に支援の「もれ・むら」をなくすための連携・コーディネーション、場作りを行うこと、平時には多様なネットワークを活かした啓発・理解促進、政策提言などを行っていくことを活動の指針として設立されました。そのため、被災地では多様な支援者が集まる情報共有会議を開催し、行政、災害ボランティアセンター、NPO/NGO との連携、支援調整などを行ってきています。そうした活動から見た被災地の現状や課題についてお話しいただきました。

ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）の小林さんからは、西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市真備町で行っている災害支援の内容と被災地の現状、課題についてお話をうかがいました。特に被災地での課題として、被災した人と被災しなかった人の間の溝のようなもの、情報格差、孤立といったことがあげられました。また、メディアの影響により被災地に集まるボランティアの人数に偏りがあること、報道の減少に伴い社

会的関心が低下することなどが課題としてあがる中、NPO/NGO の支援活動やボランティア募集の情報集約を JVOAD に期待したい、といったコメントもありました。

その後、明城さんから「支援の偏り」に関して考えるべきこととして、被害状況・避難状況だけではなく、地域特性を考えること。また、その状況に対して地元の対応能力、制度の活用・運用状況はどうかを知ること。そのバランスを見て、外部の支援がどれだけ必要かを考えることが重要だという話しがありました。支援の偏りは、外部支援のみならず、その地域が持つ地域力にも関係してくるのです。これは平時の取組みが問われることになります。

登壇者からの話を受けて、最後はグループで、自分の地域が被災することも考えながら、「支援の偏りをなくすために何ができるか」をテーマに意見交換を行いました。都会では地域のつながりが薄いから、手をあげて「助けて」と言える勇気を持つ。地域の閉鎖性も考慮し、平時から災害支援団体を知っておくことで、災害時に外部支援を受け入れやすくなるのではないか。日頃から近隣とのコミュニケーションをもつ。SNS 等を使って災害ボランティアへの関心をもってもらうようにする。などなど、多様な参加者から各自の視点で様々な意見が出ました。被災地の状況を知ることで、被災地に対して出来ることを知ると同時に、自分たちの地域で平時に取組めることも見えた 2 時間半でした。



参加者の声（アンケート結果などから）

- NPO による支援の話しは普段なかなか聞けないので参考になりました。NPO の支援情報も災害 VC と同じように体系的に整理され、WEB 上で情報提供される仕組みができると良いと感じました。
- 団体同士のネットワークにもなる貴重な機会となりました。
- 今後、立ち上げた時の事や平時から出来る取組み、意識づけについてたくさん学ぶことができました。より、仕事でも防災について考え、行動していこうと思えました。
- 災害ボランティアをメディアを通じた表面的な部分でしか見ていませんでしたが、活動する上でいろいろとご苦労があることがよく理解できました。

企画・運営

神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】
上田 英司（NPO 法人日本 NPO センター）
水田 征吾（調布市市民活動支援センター 運営委員）

１２　「子ども食堂」の魅力　食から子どもを支える、繋がる
～社会と子どもが出逢う場所～

開催目的

「子どもの貧困」「虐待」などの社会問題の対処法として一例に挙げられる「子ども食堂」。本来は子ども達の大切な居場所であり、美味しいご飯を食べながら家庭的な食卓の団欒を楽しむ機会と思われます。「子ども食堂」の名付け親の近藤博子さんから始めた頃の経緯を伺い、併せて都会や地方での活動の様子をそれぞれから報告して頂き、参加者にとって自分に相応しいスタイルを見出してもらえたらと思いました。引き出し役は藻谷浩介さん、ご意見番として杉山春さん、そのおふたりの進行で、内容を更に深めていきました。

開催日

２月１０日（日）１４:００～１６:３０

参加者数

４２名（参加者２７名、出演者８名、スタッフ７名）

出演者

藻谷 浩介さん（日本総合研究所 主席研究員）
杉山 春さん（ルポライター 「みんなの場　てとてと」 共同代表）
近藤 博子さん（気まぐれ八百屋だんだん 「子ども食堂」命名者）
星埜 俊昭さん（「めぐろ子ども食堂ネットワーク」 事務局長）
鹿山 真雄さん、青木 章子さん（栃木県足利市「がじゅまる」の家 主宰）
松田 悠希さん（宇都宮大学の学生による「あいあい食堂」 主宰）
小林 香澄さん（郁文館グローバル高等学校 食ゼミ）

内容・成果・課題

今回、子ども食堂を取り上げたきっかけは、「子どもの貧困」をテーマにした学習会で、登壇者の方が、「子どもの貧困を救うために“子ども食堂”が行われているが、その本来の当事者は参加出来ていない」と嘆きに近い訴えが有り、その後に観た映画「子ども食堂にて」で社会問題となる部分が大きくクローズアップされていて、この活動自体が難しい取り組みになっている様に思えたからでした。本来は子ども達が楽しく通う居場所として始まった筈でしたが、世の中の動きに合わせて活動内容が大きく変容し、「子ども食堂」の本質が問われているのでは？と疑念が湧きました。映画の中では命名者の思いを伝えていたのは会話の中のシーンだけでしたので、その補足をフォーラムで実施してみたいと思ったのでした。幸い、藻谷浩介さんに進行役をお願い出来たので、多様化している「子ども食堂」を鋭く分析して頂こうと思い、自分の周りで活動をしている団体へ出演を呼び掛けたところ、都内、地方、大学、高校と幅広くメンバーが集まったのでした。そして、虐待の取材を続けそこから地元で「居場所づくり」の活動を始められた杉山春さんが、進行のサポートをするご意見番を引き受けて下さり、万全の態勢で臨むことが出来ました。藻谷さんがボランティアに対するご自身の思いや考えを参加者に伝えて分科会はスタート、杉山さんとの軽妙且つ鋭いツッコミが進みます。「こども食堂」が多様化する中で、朱鷺の現在の生態系を基に、マスコミでも報道されていながら実際が伝わっていないのは当人たちの思い込みが大きく、それを変えるのは容易なことでは無いと前置きした上で、その様な目を背けたい事柄

に当事者意識を持ち自己責任に於いて活動しているのがボランティアとの前振りの後、命名者の近藤さんが「子ども食堂」の始まりとご自身の思いを紹介されました。各団体からの発表も活動報告でお願いをしていましたが、それぞれが始められた時の思いや、現在の課題などを自発的に語られたのが印象的でした。参加者の高校生のニュートラルな感覚の質問で議論が進みました。特に「子ども食堂は根本的には必要無い。そう云う世の中が理想」と云う発言が本当に大きな波紋を投げ掛けました。この想定外の方向性が生まれたことで深く、篤い話し合いとなり、それを藻谷さんが見事に展開されて下さったことで感動的なワークショップとなりました。その場の展開を臨機応変に対応したことから有意義な話し合いとなり、「子ども食堂」＝社会問題対策で実施しているのでは無い、子ども達の楽しい居場所であるという、これから「子ども食堂」を始めたい方々に対して大きなヒントを伺えた機会になったと思います。若い世代が活発に発言して大きな刺激を与えて参加のやる気を促していたのは大変重要な収穫でした。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 子ども食堂が貧困に触れる話題ということは分かっていたつもりでしたが、改めてそれがどれだけ深刻な問題なのか考えさせられるきっかけになりました。
- 多様な活動スタイルや世代、考え方を知ることができました。参加者の意見も多様であり、論議も活発でとても良かったです。
- 子ども食堂について、大人が、大学生が、高校生が、色々な立場の思いで立ち上げた人の話が聴けて、とても良い企画だと思いました。

企画・運営

鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）【主担当・報告書】
粟澤 稚冨美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター）
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

１３　キャリア×NPO～キャリアとして社会貢献していきたい若者をどう支えるか～

開催目的

近年、「社会の役に立ちたいと思う」若者は増えましたが、「後継者の不足」「人材の確保」といった組織の担い手不足は、依然多くの NPO が抱える課題です。組織基盤が整わず、定期的に職員募集ができないことも原因のひとつとして考えられていますが、そのような条件の中でも日々の若者への接し方の工夫や、ボランティアやインターンの受入れ等のしくみを整えることで若者を担い手として育てている人達がいます。日々若者と向き合う当事者の話から、社会課題解決の担い手を育てていくヒントを考えたいと思いました。

開催日時

２月９日（土）14:00～16:30

参加者数

23 名（参加者 15 名、出演者２名、スタッフ６名）

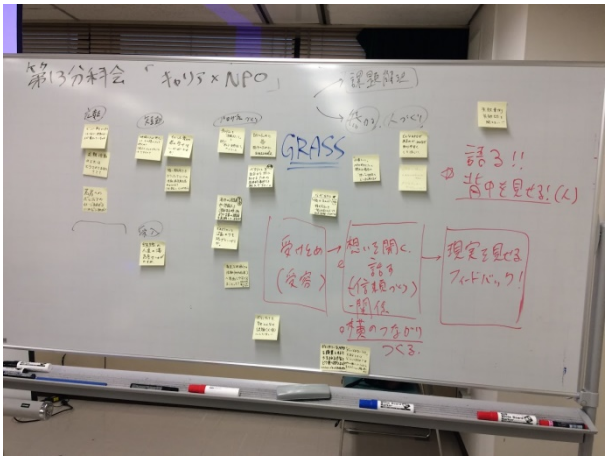
出演者

塚本 竜也さん（NPO 法人トチギ環境未来基地 代表理事）
今井 迪代さん（駒澤大学 経済学部 非常勤講師）
直井 友樹（NPO 法人 NICE 事務局次長）

内容・成果・課題

【内容】

出演者である塚本さんの所属する NPO 法人トチギ環境未来基地、直井の所属する NPO 法人 NICE からそれぞれ団体紹介から若者を担い手として育てている工夫やしくみを事例として共有しました。トチギ環境未来基地からは、環境保全活動と若者の育成の両立やボランティア・若手スタッフ育成の仕組みや工夫について共有しました。また、NICE からは、若者にボランティアに参加してもらうための工夫や参加するボランティアに社会課題とどのように向き合っていけるように関わりをもっていくかなどを共有しました。その後、今井さん進行のもと、参加者に事例共有に対して質問を出してもらい、質疑応答



を通じてさらにトピックに対する理解を深めていきました。
【成果】
　大きく以下の２点のケースで有効な工夫や仕組みがみえてきました。
＜若者を参加者から担い手にしたい＞
・参加の入り口は広くして、担い手へのステップを内部に築くこと
・現場に浸り、課題の渦に巻き込むこと
・第一次情報にたくさん触れる機会をつくること
・できるようになったことを比較してちゃんと評価できること
・貢献／体験／学びのベストミックスを探ること
・ネットワークの中に受け皿をつくること
・楽しさだけでなく、大変なことも実感としてわかってもらうこと
・具体的な指示から自分で考えてもらうオープンクエスチョンに切り替えていくこと
・活動の目標達成を柱にすること
＜若者スタッフを育成したい＞
・決まっていること以外ができる力を持ってもらうこと
・本人のやりたいを持ってもらうこと
・多様な価値観に触れて、固定化しないようにすること
・他分野連携ができるようになること
・業務のステップアップを明示すること
・だんだんとフェイドアウトして任せること
【課題】
　現状、ボランティアとして若者が集まらないことや継続しないことに頭を悩ませている団体が多いのでそちらをまずは取り組みたいと考えている方が多くなっていますが、それだけでなく、長期的な視点をもって担い手をどう育成していくかを考えてもらえるかは工夫が必要だと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・NPO×働くについて、当事者としてこれ以上ないくらい学びといいますか、明日から改めて前進するためのカになりました。
・課題解決型になりがちな近年の NPO とそうじゃないやりたいことやろう NPO。達成したいことは同じであっても、方法はいろいろでいい。法をおかさない程度に自由度があり、行動することがまず大切。等々、多くの学びをありがとうございました。
・NPO の方々の苦労が具体的にわかって良かったです。自分で探す、自分で作っていく大切さを知りました。

企画・運営

直井 友樹（NPO 法人 NICE）【主担当・報告書】
芦澤 弘子（聖学院大学 ボランティア活動支援センター）
市川 徹（株式会社世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）

１４　人と人とがつながる「協同組合」の強い絆～暮らしの課題を解決するために私たちが知っておきたいこと～

開催目的

協同組合の思想と実践がユネスコの「無形文化遺産」に登録されたことや、SDGs（国連持続可能な開発目標）の達成にあたり、役割を果たすべき民間セクターの１つとして協同組合が明記されるなど、そのあり方は世界的に高く評価されています。ご近所付き合いなど希薄になった現代社会において、これからは世代やジャンルを超えた地域のつながりづくりが必要とされており、「暮らしの課題を解決する・助け合う」という一貫した目的のために、人と人がつながるコミュニティを基盤とする協同組合から、市民活動や、市民社会を考えるきっかけにしたいと考え企画しました。

開催日時

２月９日（土）１４:00～１６:30

参加者数

23 名（参加者 16 名、出演者３名、スタッフ４名）

出演者

山口 浩平さん（駒澤大学 経済学部 非常勤講師）
松原 慶明さん（日本生協連サステナビリティ推進部 地域・コミュニティ担当）
藤方 正浩さん（生活協同組合パルシステム東京 組織・地域本部本部長）

内容・成果・課題

【内容】
出演者３名から基調講演と地域での取り組み事例などをご報告いただき、報告者への質問、意見交換を参加者と行なう「トークセッション」を行ないました。
＜出演者から＞
山口さん（基調講演）
社会的課題を認識した人と人が仲間になり、交流、連携を通して「絆」をつくり、困っていることや望んでいることは、自分たちで事業を通して解決していこうとする組合員の存在から、世界的に評価を受けている地域社会を豊かにする協同組合の仕組みなどについて解説とお話をいただきました。
松原さん（パネラー）
全国生協の社会的な取り組みと、コープこうべの店長時代における地域とのつながりから地元商品の導入や障がい者支援のイベント、１995 年の阪神淡路大震災時や昨年の西日本豪雨災害における倉敷市のボランティアセンター運営支援の仕事にも関わってこられた経験やなどについてお話をいただきました。
藤方さん（パネラー）
「よりよい社会」をつくるために、自発的な参加により、一人ひとりが学び、つながり、共に育ち行動する組合員の姿や、行政や市民団体などと協働して地域イベントへの参加や資源（場所・食・仕組み）を活用したと地域の暮らしを支えるパルシステム東京での実践などについてお話をいただきました。

【成果・課題】

「協同組合というキーワードへの興味」「人と人とのつながりが希薄な現代社会について考える為」、「地域の住民だけの力では限界を感じて、他の団体・企業など連携する必要性を感じていた」などの参加動機からも人と人とのつながりや成り立ちについて「ぜひ聞いて欲しい、知って欲しい」人々には少なからずメッセージは届けられたものと思います。次なる場面では生産者や生産現場とのつながりについても深めてみたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 「協同組合」という名前に興味がありました。それはなんだろうと思いつつ、分科会に参加しました。色々な深い知識があったけど、面白さを感じました。
- 人と人がつながる「絆」ついて考えるきっかけとなり、大変ためになりました。
- COOP の仕組みが良くわかりました。NPO との接点が多い事・・・可能性を強く感じました。
- 生産者や生産現場を守っている生協の活動も知って欲しいと思いました。

企画・運営

坂本 浩行（生活協同組合パルシステム東京）【主担当・報告書】
鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）

１５　難病当事者と語る“働く”ヒューマンライブラリー

開催目的

日本にはおよそ 700 万人（公的な調査がないため概算）もの難病や、研究途上の疾患のある人がいます。社会保障制度の対応が遅れ、症状のわかりにくさから理解が得られにくく、就労や社会参加の機会を失い、社会的に孤立してしまうケースが多々あります。しかし、それはまだまだ認知されていない社会課題です。認知を広げるとともに相互理解を深め、難病のある人も、ない人も、いかにしてより働きやすい環境・働き方をつくることができるのか、ともに探索することを目的に開催しました。

開催日時

２月９日（土）14:30～16:00

参加者数

40 名（参加者 26 名、出演者７名、スタッフ７名）

出演者

「本」役：難病のある当事者の方 ６名
斎藤 雅邦さん（株式会社ゼネラルパートナーズ atGP 事業部 事業サポートグループ マネージャー）
重光 喬之さん（NPO 法人両育わーるど 代表）

内容・成果・課題

前半は、難病のある当事者の方々を「本」役として迎え、“働く”をテーマにヒューマンライブラリーを行いました。約 30 分でおひとりのお話を聞いていただきました。ヒューマンライブラリーで、「一対一としての対話」を行うことで、難病が身近にある存在であることを感じていただき、相互理解を深めることを目的としました。

後半はアイスブレイクを挟んでから、グループディスカッションを行いました。違う「本」を読んだ人がグループにいるようにグループをランダムに作りました。

まず、それぞれが読んだ「本」について、一番感じた感情をひとことで表現していただきました。その理由を深めていくと、“働く”への障壁が見えてきます。次に、①「本」の話の中での“働く”への障壁、②参加者自身の“働く”への障壁、③自分が雇い主だとしたら、難病のある人を雇うときの障壁（＝社会からみた、難病のある人が“働く”への障壁）をそれぞれ色分けして、ポストイットで書き出してもらいました。さらに、他の人が書き出した障壁について、「もう障壁を超えているかも」「障壁ではないかも」と思うものをグループ内で話し合い、超えているものについては、模造紙を半分にした片側に移動させる作業を行いました。最後に、残った「障壁を超えられていない」ものについて、どうすれば超えられるのか、個人としてできることと、社会としてできることで分けて考え、話し合いました。

締めくくりとして、ゼネラルパートナーズと両育わーるどが行っている、難病のある人の“働くロールモデルづくり”について実例紹介をしました。今後、募集をしていくのかという質問をいただきましたが、社会制度がまだない中で、先がけとして実験的に行っている事業であること、ロールモデルづくりの中で見えてきた課題を整理してマニュアルを整えていく展望をお話いただきました。

今回の分科会の目的のひとつは、難病のある人とない人がごちゃまぜになって、同じ土台で働き方を考える“空間”をつくることでした。参加者は、難病のある人もいれば、ない人もいて、そして高校生にも参加していただくことができました。明日からの仕事や私生活にはおそらく関わり合わない人たちが集まる、そういう場は、本音が引き出される最適な場です。難病のない人が、難病のある人に対して思う、「どうしたらいいかわからない」「何ができて何ができないのかわからない」という本音を引き出すと同時に、難病のあるひとと相互に納得し、共感し、ともに社会をよくしていきたいと解決策を考える。一瞬でもそういった空間を作れたのではないかと考えています。

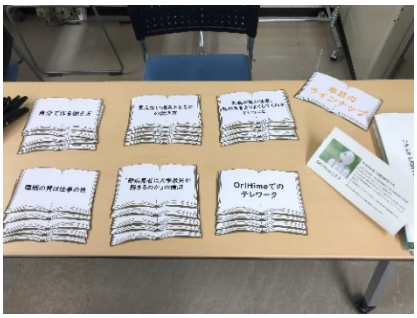
具体的な働く方法が見つかったわけではありませんが、難病のある方からは、「ひとりじゃないんだと思った」という声をいただきました。みんな同じように悩んでいるんだ。難病がなくても一緒に懸命に考える人がいるんだ。そこから感じられる「ひとりじゃない」。なんとなく、そこにいるだけで、つながっている空間でもあったのではと僭越ながら思っています。

また、当日の朝は雪だったため、車椅子を利用している出演者が 1 名来場できませんでした。そこで、ビデオ通話を使って「不自由があっても参加できる」を実現しようと試みました。ネット環境や周囲の音声の関係などでビデオ通話は難渋し、出演者・参加者ともにもどかしい思いをされたと思います。しかし、グループディスカッションから出た、IT 技術を活用した工夫を行えば障壁を乗り越えられるという意見もあったように、この経験からよりよい方法を探しだせれば、今回の分科会のテーマの“働く”に対してのみでなく、あらゆる活動への参加の選択肢になるのではという希望も見いだせました。

６枚の模造紙は両育わーるどに持ち帰り、メンバーで振り返りました。さまざまな立場から考える障壁を乗り越えるために、個人や社会ができることについて、より具体的な行動へと繋げるために、活かしていきたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 頭では理解していたつもりであった働きやすい職場・働き方を本当の意味で理解することができたように思います。グループワーク自体、とても内容が深く、アイスブレイクまで面白く全体通して参加して良かったです。
- 難病は基本孤独になりがちだと思っていましたが、向き合おうとしてくれている方が多くいらっしゃることを聞き、見たため自信が湧きました。
- ヒューマンライブラリーという対話のありかたに興味があり参加させていただきました。現場にいない方とのやりとりのむずかしさを実感しつつも、やはりお話したかったなぁ…という残念なきもちは多少あります。



企画・運営

杉浦 由希子（NPO 法人両育わーるど）【主担当・報告書】
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）
白井 長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）

１６　途上国から学ぶ地域づくり

開催目的

「途上国は貧しく遅れている。だから、発展している日本が支援しているんだ」と思っている人が、いるかもしれません。しかし、私たち国際協力をしているNGOは、そんなことはないと思っています。この分科会は、国際協力の分野では「上から下への援助」という一方的な視点を捨て、お互いに学び合う姿勢がとても大切であるということを伝えると同時に、国際協力NGOがアジアやアフリカの途上国で実施しているプロジェクトから、日本での地域づくりのヒントを学ぶことを目的として開催しました。

開催日時

２月９日（土）14:00～16:30

参加者数

16名（参加者11名、出演者３名、ボランティア１名、スタッフ１名）

出演者

巣内 秀太郎さん（NPO法人エイズ孤児支援NGO・PLAS）
菅原 伸忠さん（NPO法人シャプラニール＝市民による海外協力の会）
西山 美希さん（NPO法人シェア＝国際保健協力市民の会）

内容・成果・課題

国際協力の第一線で活動する講師たちから、それぞれの団体が実施するプロジェクトの紹介と、そこでの学びを参加者に伝えました。その後参加者はグループに分かれ、講師から学んだことや地域づくりに活かせると考えたことなどの共有、講師への質問などを行いました。

１．講師からのプレゼンテーション

・巣内 秀太郎さん：「ウガンダにおける在来野菜によるHIV陽性者グループの生計向上プロジェクト」

現地でプロジェクトを実施するにあたり、将来ウガンダの人たちが自分たちでプロジェクトを運営できるように、持続性・継続性を重要視しました。そのために、プロジェクトに対するオーナーシップの形成という点に、丁寧に取り組みました。たとえばプロジェクトの形成だけでなく評価にも関わってもらう、活動資金の確保についてアイデアを出してもらいそれを実施するなど、プロジェクトの様々な段階でこうした工夫を凝らしています。

・菅原 伸忠さん：「バングラデシュにおける住民主体のコミュニティ防災プロジェクト」

地域にある資源を活用したことが、このプロジェクトで特に大切にした点です。ここでいう資源とは、地域の公的な制度や人材のことです。たとえば青少年グループを地域防災の核に据えたことで、彼らの家族にまで防災の意識が広まりました。また行政担当者と地域の代表者によって構成される地域防災委員会が機能するように働きかけたことで、地域内で防災の意思決定が適切になされるようになりました。このように、地域にある社会的資源を分析・開拓し、活用されていない制度に着目することは、日本の地域づくりにも活かせる点だと考えています。

・西山 美希さん：「東日本大震災　気仙沼での保健活動（タイでの保健プロジェクトを参考に）」

タイで実施したエイズプロジェクトの学びをもとに、東日本大震災発生時に、宮城県の気仙沼にて緊急支援フェーズと復興支援のフェーズに分けて保健活動を行いました。前者では仮設住宅の巡回健康相談や、市と連携して全国の自治体から派遣されてくる保健師に対するオリエンテーションなどを、後者では仮設住宅に住む人々に対する健康増進活動やコミュニティ活動の支援、地元の NPO の運営強化に取り組みました。こうした活動を通じて、日本の地域づくりにも以下の学びが活かせると考えています。1）地域を取り巻く多様な人々の参加を促す、2）当事者や住民の声を聞いてニーズに基づく活動を行う、3）信頼関係づくりが重要である、4）お互いの特性を活かすため、つなぐ役割やきっかけが必要。

2．グループワーク

以下の３点をトピックとして、３つのグループに分かれて情報と意見の共有をおこないました。また、それぞれのグループには講師がファシリテーターとして参加しました。1）講師の話を聞いて自分の住む地域や所属するコミュニティでも活かせそうだと思った点。2）「途上国」や「国際協力」に対する見方・考え方が変わった点、変わらなかった点。3）もっと知りたい、講師に質問してみたいと思う点。参加者は、高校生から７０歳を超える人生経験豊富な方まで様々な人が参加し、グループワークは多様な意見が飛び交い、参加者同士でも大変な学びの場となりました。

たとえばトピック１については、「相互理解を目指していきたいと思う」「主体が誰かを考え行動することが大切だという学びがあった」「地域の資源を活用することは、日本でも取り入れられる」と言った声がありました。トピック２については、「信頼作りの難しさは、国内・海外でも一緒だということが新しい発見だった」「国際協力を行うには、こちらが一方的な支援や価値観を持ち込むのではなく、現地の人と一緒になって考えることが大切だとわかった」「日本の問題に向き合いたいと思った」といった意見がでました。また、グループワーク中にはファシリテーターとも積極的に質問ややりとりが交わされ、どの参加者も満足に発言する機会を得ることができたようでした。

ファシリテーターとして参加した講師からも、海外で学んだことを、これから日本でも還元していかなければならないと考えているので、今日の分科会や参加者からの意見はとても勉強になったというコメントがありました。

全体としては、参加人数もちょうどよく、グループに分かれて十分な話し合いができたと思います。最後にグループワークの内容をグループごとに発表しましたが、どのグループからも「「先進国→途上国」という一方的な考えではなく、お互いが学び合う姿勢が大切だ」という意見が聞かれ、分科会の目的を十分に達成できたと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 「地域づくり」を海外の取組みを参考に考えるというテーマに関心を持ちました。今ある制度を活用し、住民主体を中心にということは日本での活動を行っていく上でとても重要と感じました。
- ３つの事例の中で、自律的、自立的な活動として、事業終了後も仕組みが続いて行く事が大切だと思いました。
- 既存の仕組みを活用するということは、日本においても学ぶべきだと感じました。
- 自分自身が地域づくりにかかわっているので、海外支援の中から共通点として多くあるということがよくわかりました。非常に活かせることが多くあるということに気がつきました。

企画・運営

末永 明日香（NPO 法人シェア＝国際保健協力市民の会）【主担当・報告書】

★ 話そうカフェ　IRODORI（イロドリ）

開催目的

分科会へ参加し、分科会中で得た考えや思いを登壇者の方や他の参加者同士とより深く語り合いたいという参加者が、登壇者や実行委員も含め飲食を交えながら自由に語り合える場づくりを目的として開店（企画）しました。

開催日時

２月９日（土）17:00～18:30

内容・成果・課題

分科会参加者の方には名札を下げていただき、各分科会の登壇者の方にはぼらせん煎餅で作成したオリジナルメダルを首から下げていただくことにより、参加者が語り合いたい相手を探しやすいようしました。

室内には 10 つのブースを展開しました。そのうちの２つがオイルランプの製作が出来るブース（協力：VCAS）と手話での会話が体験できるブースであり、残りを自由に団欒が出来るブースとして展開をしました。オイルランプ製作ブースでは製作に加え、オイルランプを活用した防災に関する話もしていただきました。また、手話体験ブースでは実際に手話で会話を楽しんだり、手話を習ったり体験し楽しみました。（右：写真 1）

写真 1

会の進行の一つとして、突撃レポーターと称しカフェ内の各ブースでどのような会話が展開されているのかを他のブースの人たちにも共有できるようにマイク回しなどを行いました。そこでは、ボランティアに関することや、子ども食堂、防災など、各分科会で行われた内容で各々が会話に花を咲かせている姿が見受けられました。（右：写真２）

カフェ内では、ソフトドリンクと株式会社ガイア様にご提供いただいたお菓子に加え、ペルノ・リカール・ジャパン株式会社様にご提供いただいたワインを無償で、またビールについては有償で提供し、飲食をしながら各々が自由に会話を楽しむ場をつくりあげました。（右：写真３）

写真３

カフェ閉店前には、カフェにご参加いただいた各分科会の登壇者の方々に、一言ずつお言葉を頂戴いたしました。そこでは、今回の分科会での感想を含め今後に対する意気込みや、活動への熱い想いを聞くことが出来ました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・昨年と比べて変わった部分もあり、年々工夫をして良くしていこうとしているのが感じられてよかったです。
・カフェ IRODORI で分科会でご一緒した方とまたお茶をいただきながら話せたことがよかったです。
・交流会は例年通りの方が良いと思います。

企画・運営

芦澤 弘子（聖学院大学 ボランティア活動支援センター）
石橋 茜（東京盲ろう者友の会）
鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）
釜島 豪顕（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）
神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
坂本 浩行（生活協同組合パルシステム東京）
白井 長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）
鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）
宮崎 雅也（日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター）
佐藤 優衣（駒澤大学 ３年）【報告書】

１７　地域にふれる第一歩～体験だけで終わってない？ホントの福祉教育について考えよう～

開催目的

以前より学校等で行われている福祉教育は、限られた時間の中でプログラムをこなすことが優先され、子どもたちにとってどのような学びがあったのかを把握できていないのが現状です。また、パターン化しがちな福祉教育プログラムですが、福祉教育と一言にいっても様々なやり方や形があります。

この分科会を通して、“地域や福祉に触れるきっかけづくりとしての福祉教育”そして“その後地域とつながりを持てるような福祉教育”とは何かを考えます。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

39 名（参加者 31 名、出演者４名、ボランティア２名、スタッフ２名）

出演者

福原 冬彦さん（日野市立豊田小学校 主幹教諭）
花井 香さん　（杉並区立松庵小学校 学校支援本部 学校・地域コーディネーター）
大野 泰平さん（東洋大学 バリアフリーサークル歩み 初代代表）
浅野 芳明さん（荒川ボランティアセンター センター長）

内容・成果・課題

【内容】
１．登壇者より福祉教育の取り組みについて報告
１）福原 冬彦さん（日野市立豊田小学校 主幹教諭）
豊田小学校では、子ども一人一人が、地域の中で学び、人との関わりを通して地域の一員としての自覚を高めています。低学年では、生活科の時間に地域の人と関わり、３年生以上は、すべての学級で、グループごとに地域の中から課題を見つけ、活動を企画し活動をしています。地域の願いをくんだものものあれば、自分たちの気付きから派生した課題もあります。地域から見出した課題は多種多様です。子どもたちの取り組みを通して、学校が開かれていき、地域の人との一体感も出てきています。福祉教育と銘打たない福祉教育となっている事例を子どもたちの活動を中心に紹介しました。福祉教育などの体験学習を学びのまとめと考える人も多いかも知れませんが、体験は学びのトビラであり、きっかけづくりです。その前後の学びが大切だと思います。また、裏付けのない自己肯定感は、自分より出来る人に出会うと負けてしまいます。福祉教育を通して褒められることや必要とされているという実感を得ることによって、自己有用感の高い子どもを育てたいです。
２）大野 泰平さん（東洋大学 バリアフリーサークル歩み 初代代表）
大野さんは、脳性麻痺のため、車いすで生活しています。地域で育てたいという親の希望で、保育園から今まで普通学校で生活してきました。日々の生活は友人がサポートしてくれたこともあり、自分から発信していく大切さを学びました。福祉教育に必要なのは子どもたちの想像力を大事にすることだと思います。車椅子体験やアイマスクを使った体験は大変さや恐怖心を伝えるようなものが多く、「障がいがある人には思いやりを持って接するんだよ」といった授業が多いと感じています。ですが、障がいのあるなしにかかわらず、一緒に楽しむ中で相手のことを知りながら、困ったときにサポートするような関係性を大事にしていきたいです。なにかしらの理由で一緒に楽しめない子がいたときに、一緒に楽しむ方法をみんなで考えてほしいと思っています。だからこそ、“一緒にいる”ことを大切

にしたいです。一緒にいることで相手を知り、仲良くなり、一緒に楽しむことができるのではないかと思います。

3）花井 香さん（杉並区立松庵小学校 学校支援本部 学校・地域コーディネーター）

杉並区立松庵小学校では、地域の住民が学校への地域参加を可能にするために、地域総ぐるみの教育を行っています。学校は地域コミュニティの中心という考え方です。福祉教育は、「誰にでもすみよい街作り」をテーマに様々なプログラムを外部講師を招いて行い、そのコーディネートを学校支援本部、“あん子応援団”で行っています。多くの学校は外部講師を招きたいという思いがあり、地域の人も学校に入りたいと思っているのにもかかわらず、片思い同士になってしまいます。学校が地域を巻き込む秘訣は、活動の見える化と当事者意識だと思います。学校も地域もみんなで活動するために、組織を作り、地域の中で人材バンクを構築しています。多くの人とのネットワークをつなげ、先生を助けたいという熱い思いで活動していますが、先生に授業力がなければ外部人材は生かされません。学校のルールを尊重しつつ、“子どもたちのために”というみんなの想いをひとつに活動をしています。

2．グループワーク「ホントの福祉教育について考えよう」

登壇者３名の話を受けて、改めて“福祉教育を通して育てたい子ども像や目指すこと”“福祉教育を行うにあたって感じている課題、直面するであろう課題”について参加者と登壇者の皆さんで話し合いました。

【成果・課題】

３人の登壇者の方にお話し頂いた事で、それぞれの立場から考えるより良い福祉教育について、また新たな福祉教育の視点を学ぶことができました。たくさんの方が福祉教育への課題や熱い思いをもっており、今後、福祉教育に関連する様々な立場の人たち同士が情報交換をする場が必要なのではないかと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 登壇者の方々、それぞれの視点からの学びがありました。福祉教育の場で、「必然性」を伝えることの重要ポイントを得て帰ります。学ぶだけで終わらせず、身近な場におとしこむヒントをいただきました。
- 「福祉教育」を教えたがっている。ハッとさせられました。どうして、学校は？先生は？とばかり思っていましたが、自分も改めるべきでした。

企画・運営

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会　荒川ボランティアセンター）【主担当・報告書】
畑佐 憲（あらかわ子ども応援ネットワーク 事務局）

１８　子どもの権利条約から３０年
～子どもと大人が共存する豊かな地域～

開催目的

2019 年は子どもの権利条約が採択されて 30 年。この間、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しました。３０年前に宣言された子どもの権利条約について理解を深めるとともに、現代社会で必要とされる子どもの権利（生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利）についてについて考えます。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

20 名（参加者 11 名、出演者２名、スタッフ７名）

出演者

森 郁子さん（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 海外事業部。保育士。発達心理を学部専攻、児童福祉の修士号取得。前職では自治体の虐待対策支援チームにて子どもへの在宅支援等に従事。

2009 年セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン入局。子どもの権利の観点による子ども保護関連の事業や、2011 年３月以降は東日本大震災緊急・復興支援事業などに携わる。2015 年より、養育者支援プログラム「ポジティブ・ディシプリン」のトレーナーとしてファシリテーター養成を担当。現在は海外における子どもの保護事業にも携わる。

井垣 利朗さん（八王子市立中野児童館 児童館長）

学生時代より、児童館と野外活動のボランティア活動に取り組む。平成３年から八王子児童館・放課後児童クラブに勤務。現在は八王子市立中野児童館長。子どもの意見表明を尊重し、子どもにやさしいまちづくりを目指す市政に、子どもの意見を反映させる子ども参画の取り組みに従事。日本レクリエーションインストラクター、余暇開発指導員、児童健全育成指導士として、全国で講演活動も行っている。

内容・成果・課題

分科会の冒頭は、「子どもの権利条約を知ろう！基本の『キ』から」と題し、講師である森さんから子どもの権利条約を身近に感じてもらうための導入ワークショップとレクチャーが行われました。レクチャーで紹介された子どもの権利条約の特徴は、以下になります。

- 1989 年 11 月 20 日、国際連合が子どもの権利条約を制定
- 日本政府は、1994 年４月 22 日、子どもの権利条約に批准
- 1924 年　子どもの権利宣言が行われ、６５年間議論されてきた
- 全体は 54 条から成り、最も包括的権利だといわれている
- 条約は、「権利」を保証する義務履行者を明確に定めている
- 条約は「国連子どもの権利委員会」の設置し、国の履行状況を監視している

レクチャーのあとは、八王子市立中野児童館の取り組みについて、井垣さんより事例報告をいただきました。八王子市は平成 12 年に、国連の「子どもの権利条約」をうけてその精神を尊重し、「子どもすこやか宣言」を行いました。 また、この条約の第 12 条 「子どもの意見表明権」に基づき、子どもが自由に自分の考えや意見、気持ちを発表できる機会をつくることをめざして、「子ども会議」の開催を決めました。しかし、当初の目標は、子ども条例をつくることが目標でしたが、子どもの権利に関する理解が十分ではなく、宣言文にとどまったと報告がありました。議論をきっかけとして、子どもの権利に関する機運が高まったこともあり、大人に啓発活動をしていく動きにつながっていたそうです。

子ども会議では、まちづくり計画に子ども自身の意見をいれてほしいという気持ちがあったそうです。子どもたちにとって住みやすいまちは、誰もが住みやすいまちでもあるはず。子ども会議は、その後、行政も一緒になって、市内全体の取り組みにひろがっていったと報告がありました。

議論されたこと

- 日本における子どもの権利条約は、まだまだ不十分なところが指摘されていること。特に、体罰については、国際的にも見直しのための批判がでていること。
- 子どもの権利条約で、参加する権利への意識がまだまだ低いこと。施設では、守られる権利が重要視され、子どもたちの意見を聞くことが置き去りにされている場面がある。

まとめ

- 権利とはあたりまえのこと。しかし、子どもたちにとってのあたりまえ＝権利は何かをしるところから始めなければいけないと思いました。特に、日本国内では、あたりまえと考えられていること、仕方ないこと、諦めていることが、国際的には違った意見があることも知らなければならないと思いました。子どもの権利条約から 30 年の節目の年になるので、権利を基礎として、自分たちの取り組みを見直すきっかけになることを期待したいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 子どもの権利という言葉を大事にしていると思っていても、実は、それを実行していないことにあらためて気づきました。そう思った時に井垣さん（八王子）の実践のすごさをあらためて感じました。
- 子どもの権利条約について、詳しい資料や条文そのものを改めて意識でき日頃の自身の活動をよくふりかえることができました。
- それぞれ権利条約のどれと、子どもを応援する活動が結びついているか、確認ができて有意義でした。

企画・運営

上田 英司（NPO 法人日本 NPO センター）【主担当・報告書】
粟澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター）
佐藤 優衣（駒澤大学 ３年）
鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）

１９　～持続可能な社会を目指して～SDGs の取り組みにおける学生ボランティアの可能性を探ろう！

開催目的

　少しずつ広まりつつある国連の持続可能な開発目標「SDGs」が自分たちのボランティア活動とどのような関係があるのか？当分科会では、SDGs の目標を通じて、日頃の取り組みと世界の課題とのつながりに気づき、活動をさらに発展させるために自分たちができることを考える場を持ちました。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

33 名（参加者 22 名、出演者４名、当日ボランティア４名、
　　スタッフ３名）

出演者

森 良さん（NPO 法人エコ・コミュニケーションセンター 代表）
神田 知典さん（NPO 法人エコ・コミュニケーションセンター）
山下 美玖さん（東洋大学 ３年）
川田 虎男さん（聖学院大学 ボランティア活動支援センター アドバイザー）

内容・成果・課題

【内容】

１．　オリエンテーション（SDGs ってなぁに）

　SDGs（Sustainable Development Goals）について英語の本来の意味をたどりながら、SDGs の意味について解説を行いました。さらに、SDGs の目標は易しいことからやるのではなく、最も困っている人たち、もっとも弱くて大変なところからまず手をつけようというという目標であること、最も悲惨な状態の所から解決する根本療法をとろうということを「誰も取り残さない」という考え方で示していることが共有されました。

２．　世界とのつながりに気づくワーク

　１）　自分のやりたいこと（ボランティア活動に限らない）をポストイットに各自記入し、グループで共有します。似た内容毎に模造紙内にまとめて、見出しを付けます。

　２）　世界や社会の問題で気になることを１）とは別の色のポストイットに各自記入し、グループで共有します。模造紙の外側に似た内容毎にまとめておきます。

　３）　「やりたいこと」が「気になること」の解決につながりそうなものを見つけて、つながるもの同士は線でつなぎます。さらにどうつながるのかの理由を別の色のポストイットに書いて線のうえに貼ります。

　４）　グループごとに、模造紙のタイトルと日付、参加者の氏名を記入します。

５）　ワークをやって気がついたことを話しあい、A3 用紙にまとめて記入します。

3.　話題提供

山下 美玖さん（東洋大学 ３年）からは、自身が取り組むボランティア活動についての報告と、活動をより豊かにするためにどのようなことが考えられるかについてお話いただきました。

川田 虎男さん（聖学院大学 ボランティア活動支援センター アドバイザー）からは、NPO 法人エコ・コミュニケーションセンターの森さんと取り組んだ学生対象の SDGs 研修会の様子と、冊子発行について報告いただきました。

4.　ワーク「何をやったらよいか」

ワークシートに基づき、各自、これからなにをやったらいいかを書き出した。その後、グループ内で発表し、励ましのメッセージを送りあいました。

5.　まとめ

２の５）の気づきを共有しながら、森さんのほうで以下のようにまとめを行いました。

- 「ひとつのことを解決するとすべてが解決できるのかもしれない。でもどこから手をつけたらよいのか。」という問いに対しては、自分が手をつけやすいところから始めたらよいと思う。
- 今回のグループには高校生もいれば、社会人もいた。いろんな人が一緒に話すとこれまで思ってもいなかった気づきが生まれる。
- 食べることを入り口にするなど、誰もが関心を持つところから取り組んでいくのはよい。
- いろんな人のアイデアをもらって、自分で考える。考えを発表して、またいろんな人に意見をもらってやってみる。自分で考えるのだけど、いろんな人にアイデアや意見をもらう。そういうかたちで、活動を豊かに発展させていけたらと思う。
- 自発性を大事にするという考え方の「ティール組織」が世界で広まりつつある。今回のやり方はこれに当てはまる。

【成果】多くの課題や問題がつながりあっている、自身の取り組んでいることが全体の課題解決につながっている、という大切な気づきを参加者間で共有することができた。

【課題】SDGｓは、目標⑰の「実施手段：パートナーシップで目標を達成しよう」が１つの大切なキーワードとなっている。この目標を多くの人が認識することで、学生や高校生、NPO・市民活動団体の同分野のみならず異分野も含めた連携が進むことを期待したい。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 最初はどうまとめていくのか見えませんでしたが、やってみるとつながりに気づくことができて素晴しいと思いました。
- 自分の活動について SDGｓとのつながりを考えることがなかったので、きっかけになりました。今日の最後のワークをきちんと実践したいと思います。
- SDGｓの本質パートが分かりとても勉強になりました。参加した高校生たちの意識が高いことに驚きました。

企画・運営

芦澤 弘子（聖学院大学 ボランティア活動支援センター）【主担当・報告書】
直井 友樹（NPO 法人 NICE）
村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）

２０　私たちが求める地域のカタチ
～地域包括ケアシステムを超えて～

開催目的

現在、地域社会のつながりや支え合いが失われていますが、誰もが安心して暮らしていくためには、困っている人を支える仕組みや制度が必要です。介護保険制度では、「地域包括ケアシステム」が進められていますが、十分とは言えません。この分科会では、地域の中で、どのようにつながりをつくるのかについて考えます。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

35 名（参加者 27 名、出演者４名、スタッフ４名）

出演者

村上　孝子さん（社会福祉法人北町大家族）
森田　眞希さん（NPO 法人地域の寄り合い所　また明日）
八幡　茂子さん（NPO 法人地域ケアネットワークゆいまぁる）
安藤　雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター　アドバイザー）

内容・成果・課題

1.パネルディスカッション
1）コーディネーターの安藤さんの話
地域包括ケアということは、介護保険で使われる前から、言われています。2016 年３月に最高裁である判決が出ました。認知症の男性が徘徊して列車に轢かれて亡くなった愛知の事故で、鉄道会社が損害賠償を求めた裁判です。一審は監督責任を怠ったと家族が全面敗訴、二審は責任を認めつつ、損害賠償が半額となる結果でした。これが社会的な方向性になることは避けたいと、家族は控訴し、家族に責任はないと判決が出ます。画期的な裁判でしたが、判決ではどこに責任があるのかは全く触れていません。地域社会の中でどう見守っていくのかが問われているのです。私たちが考える地域包括ケアシステムとはどの様なものなのか？事例を通して学びましょう。
2）村上さんのお話
練馬の商店のおばさんです。活動のきっかけとなったのは、商店街の近くに大規模小売店舗が来たこと。戦っても勝てないので、地域に恩返しをしようと４人で地域の高齢者を支援する「いこいの家」を、1999 年に 60 畳の商店街会館を使って始めます。区境なので、練馬以外の人でも受け入れました。活動を始めると、昼間独居が多いことがわかります。民生委員や役所に行っても、個人情報保護が邪魔して情報が得られません。しかし、商店の仲間が情報を持っていました。その後、同じ場所で、ママと子どもがゆっくりできる「かるがも親子の家」を開始。今は社会福祉法人ですが、2001 年に NPO 法人化したおかげで、行政からお金もらえる事業に手を挙げ、資格を持った人でやれるようになりました。現在は、「かるがも親子の家」は２ヶ所で、１ヶ所は毎日預かり保育をやっています。高齢者支援は「いこいの家」から始まって、区役所の生きがいデイサービス事業を３ヶ所。来る人数によって補助金が違うのは何なんでしょうか？また、「かるがも親子の家」のちびちゃんが小学校に行く様になるので、学童保育にも手を挙げて、行政から２ヶ所の委託を受けています。

練馬社協・光が丘ボランティアコーナーの呼びかけで、最近「グリーンリボンネットワーク」ができました。障害者から相談が来て、わからないと思っていたところに、話がありました。一昨年から隔月で会合を持っています。メンバーは、行政、民間等地域でさまざまな福祉事業をやる人たちです。

3）森田さんのお話

夫は介護福祉士、私は保育士で最初に就職したのがどちらも小金井でした。1998 年に夫、仲間たちと独立して、施設をつくります。2006 年に「NPO 法人地域の寄り合い所　また明日」を設立。地域への開放スペース「寄り合い所」、認知症専門デイサービス「また明日デイホーム」、認可外保育「小さな保育園　虹のおうち」、認可保育「また明日保育園」を行っています。スタートは認可外保育園だけでしたが、4 年前に子ども・子育て支援新制度ができ、認可保育も行うようになりました。文字で書くと 4 つの事業ですが、実態は全部混ざって行っています。そもそも赤ちゃんは、いつも世話を受けるばかりの存在なのか？高齢者、障害者はいつも世話を受けるばかりの存在？赤ちゃんからお年寄りまでいるという当たり前の姿、このスタイルが一つの答えだと思っています。

介護保険のデイホームの許認可権は小金井市ですが、若い行政マンは、12 名定員なのにイスが 12 個ないと言いました。保育も認可を取ろうとすると、何センチの便座が何個必要等いろんなハードルがあります。課長は、「制度に合わせたらやりたいことがやれない、後から制度がついてくるので、機会を逃さないように」と。そのうち、新制度ができ一部認可を受けました。厚労省には全く話が通じませんでしたね。書類ではデイホームや保育の線引きはされますが、その線はどこなのかとしつこく聞かれました。縦割りの良いところ？は、他の所管のことはお互いに確認をしないことでしょうか。

4）八幡さんのお話

東久留米の地域密着で 1999 年から始め 20 周年。子育てで地域に世話になり、恩返しの思いです。一人の人が生きていくためにあると良いなと、介護保険のケアマネ、ホームヘルプ、小規模多機能、保険外の食事サービス、移動サポート等少しずつつくってきました。地域のいろいろな人、資源とのネットワークにこだわっています。ネットワークの網目を構成するのは人ですが、スタッフ、ボランティア等多様性を大切にしてきました。地域包括支援センター以前から、さまざまな相談に対応し、地域包括ケアの一翼を担ってきた自負があります。ニーズに応えているうちに、利用者約 650 人、職員約 100 人になりました。職員でもボランティアでも、一人ひとりが自立した市民に育てば、より良い社会になるイメージでNPO 法人を選びました。事業をやるにはNPO でも会社でも労基法を守ることが必須です。職員、ボランティアがどうつながるか、地域にアンテナを立てる職員をどう育てるか等課題はあります。

デイの送迎や弁当配達で車があったので、ニーズに迫られ移送サービスを始めました。2006 年福祉有償運送法ができ、白タク行為にならないよう制度に乗せました。ボランタリーな支え合い前提の制度ですが、デイの送迎と異なる訳にはいかず、すべて雇用でやり人件費が膨らみました。それが、支えきれなくなったのと、人身事故などのリスクが出てきたので止めました。インフラも社会的な状況も整備され、役割は果たしたと思っています。20 年経過し、さまざまな見直しをしているところです。

2.グループディスカッション

6 つのグループに分かれ、多様性、専門性をキーワードに意見交換を行うとともに、パネラーへの質問を出しました。最後にまとめとして、安藤さんより、行政が言う仕組みを超えて、新しい地域包括ケアシステムをつくることの重要性が提起されました。その際には、地域性、おせっかい等が大切で、ごちゃまぜの中の専門性、専門性の中のごちゃまぜをどうつくるかが重要であることが指摘されました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・「誰でもつながっていなければいけない」「待つ事」「職員を育てる」「心が動かないと身体は動かない」「どうやってアンテナをたてるか」が印象に残りました。
・ごちゃまぜの良さが伝わる分科会！「新しい地域包括ケア」社協としても考えていこうと思います。

企画・運営

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）【主担当・報告書】
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

２１　助成金は「想い」もつなぐ
～出し手と受け手の「幸せな出会い」のために～

開催目的

　ボランティアグループやＮＰＯの資金づくりの方法は多様になっていますが、いざというときにまとまった金額として頼りにしたい１つに「助成金」があります。一方、助成金の出し手側も、より良い支援となるように助成テーマ・方法、受け手探しなどを工夫しています。
　そこで今回は出し手と受け手の「幸せな出会い」について、出し手と受け手、双方の「想い」を知りあう機会とすることを目的に開催しました。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

39 名（参加 27 名、出演者９名、ボランティア１名、スタッフ２名）

出演者

北沢　巌さん（社会福祉法人読売光と愛の事業団）
吉野　裕之さん（一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団）
原田　健児さん（社会福祉法人清水基金）
益田　尚志さん（一般財団法人松翁会）
北村　公重さん（公益財団法人キリン福祉財団）
花崎　和彦さん（公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団）
有竹　丈司さん（中央労働金庫）
柴田　吉彦さん（公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団）
松長　乃生さん（生活協同組合パルシステム東京）

内容・成果・課題

事例報告「団体のはばたきを応援できた、『幸せな出会い』について」
　助成金プログラムの事務局を担う、北沢さん（読売光と愛の事業団）、吉野さん（ハウジングアンドコミュニティ財団）より、それぞれの財団設立の理念や想い、助成することで、団体の活動がレベルアップし、助成後もお金に限らない支援をすることが出来ている幸せな事例について報告がありました。
グループワーク１
　各グループに入った助成財団スタッフから、残念ながら『幸せな出会い』にはつながらなかった事例についてお話がありました。そのなかで、各参加者の悩みや課題の相談が共有されました。
グループワーク２
　『幸せな出会い』につながるためには、どのようにしたらよいのか、これからできることについて、助成の出し手、受け手がともに考える機会となりました。

全体共有・助成財団からのコメント・まとめ

各グループで話し合われた内容を共有し、各助成財団から「出し手と受け手、中間支援組織の双方向のコミュニケーションが大切であることをあらためて感じた」「助成金はマッチングがいかにうまくいくかがポイント」「助成対象となる分野などは広くとらえて考えてもらえれば」「助成金のコミュニケーションの発端は書類にはなるが、お話をきいて想いの熱さを感じた」などのコメントや助成に向けたヒントやメッセージなどが寄せられました。本分科会では、ボランティア・ＮＰＯ団体関係者、助成財団担当者、中間支援組織と多様な参加がありましたが、中間支援組織の助成金における役割の重要性もあらためて確認されました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 財団の方の熱い想いを聞いて、こちらも熱くなりました。各方とのお話の中から、得るものが多々あったり、マッチングを見つけたら、表現にも工夫し、助けられ上手になろうと思いました。
- 助成する団体・中間の支援団体・助成を受けたい団体。コミュニケーションをとる大切さ、幸せを生む助成、多方面から助成を考える事ができました。とても有意義でした。
- 助成団体の方々の思いをきくことができて、とても有意義でした。ずっと何年も来たかった分科会、やはり来て良かったです。地域の団体さんの顔を思いうかべながら、これからもより良い支援をしていきたいと改めて思いました。
- 意見交換できてよかったです。中間支援の方がいらっしゃることがすごく大切だと感じました。また、説明会なども重要だと勉強になりました。
- 私のグループは、助成金を審査する側、助成元、中支センター、一般の方と、多様なバックグランドをもつ人々だったので、様々な意見が出て、大変参考になりました。「助成申請に落ちた団体へのフォローアップの場がない」など。助成金と五感とのつながりについて、今まで持っていなかった視点なので、勉強になりました。成果報告会でのヨコのつながりも、協働が生まれる場だと知りました。

企画・運営

坂本 浩行（生活協同組合パルシステム東京）
松長 乃生（生活協同組合パルシステム東京）
谷口 陽香（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当】
野崎 勝也（東京都社会福祉協議会）【報告書】

２２　困っている人に声をかける勇気 ～ヘルプマークを見かけたら～

開催目的

ヘルプマークとは、外見からは分からなくても援助や配慮を必要としている方々が、そのことを周囲の方に知らせることができるマークです。しかし、ヘルプマークを身に着けている方のニーズも様々であるため、何に困っているのか分からず、声をかけることができないと悩む方もいるのではないかと思います。そこで、普段からヘルプマークを身に着けている方のお話を聞き、どんな人が身に着け、何に困り、何を求めているのか知り、自分がヘルプマークにどう関わることができるのか考えます。

さら視野を広げ、助け合いのしるしであるヘルプマークがなくても、困っている人に自然と声をかけ、助け合うことができる社会をどのように作ることができるのかを考えます。

開催日時

２月 10 日（日）10:00～12:30

参加者数

24 名（参加者 17 名、出演者２名、スタッフ５名）

出演者

香取 久之さん（希少難病ネットつながる-Rare Disease net TSUNAGARU-）
麻田 モモカさん（病気と生きるプロジェクト）

内容・成果・課題

ヘルプマークを身に着けている方も多く参加してくださり、様々な視点でテーマを考えることができました。

香取さんからは、ヘルプマークの対象でもある希少難病について、社会課題の解決のために『伝え・繋がり・実践する』ことの重要性、取り組まれているヘルプマークの普及活動などヘルプマークにつながる広い視点でお話をいただきました。麻田さんからは、なぜヘルプマークを身に着けているのか、麻田さんがヘルプマークを身に着けることによって表していること、支援者側が意思表明をするための『やさしさコネクトマーク』についてなど麻田さんの視点でお話をいただきました。

お二人のお話を受け、参加者も一緒になって意見交換を行いました。ヘルプマークがどんな場面で役に立つのか、ヘルプマークに地域差があることをどう感じるかなど、参加者から様々な質問が出ました。また、「外見では分からないからこそ、分かってもらうために声を上げ勇気がいる」という香取さんのお話や「ヘルプマークを身に着けている人を見かけると私だけじゃないと感じる」という麻田さんのお話から、ヘルプマークから『孤立』という課題に目を向けることもできました。そして、参加者からヘルプマークがなくとも助け合える社会をどうすれば作ることができるのかという疑問が自然と出てきました。ヘルプマークによって描かれる助け合いを実現するためには、一人一人が抱えるものを知り、認め、行動することが必要です。それは多様性の承認であり、見えづらいものを見るためのヘルプマークは、支え、支えられる社会の醸成につながる一つの方策なのではないかと全員でヘルプマークについての考えを深めました。

次に意見交換でもあったように、ヘルプマークの有無に関わらず、困っている人に声をかける勇気という点でグループトークを行いました。ここでは、「困っている人に声をかけようとしてやめた経験」と「困っているときに誰かに声をかけられた経験」というトークテーマを設定し、一人ずつその経験について共有していただきました。それをもとに、なぜ困っている人に声をかけづらいのか、困っている人に声をかけるにはどうしたら良いか、困っているとは何かなど、グループで話を深めていきました。その状況で何をすれば良いかを想像できるからこそ声をかけることができる、気軽に声をかけられるような合言葉があれば良いなど様々な視点でグループごとに話が膨らんだようでした。

ヘルプマークが正しく機能するためには、市民一人一人がそれを知り、考え、行動する必要があります。ヘルプマークには市民一人一人がどう社会と関わっていくかを考える、市民社会を考えるきっかけとなる可能性が秘められているのではないでしょうか。人は一人では生きていけない。人間関係が希薄化している今だからこそ、どのように支え、支えられる社会を作っていくことができるのかを引き続き

考えていく必要があります。また、ヘルプマークが不誠実なラベルにならないように、正しい理解をする、伝える必要があると考えます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ヘルプマークのきっかけとしてお話が具体的にきくことができたのでよかったです！
- ヘルプマークへの理解が大変深まりました。もっと多くの方にも知っていただく機会を自身も提供できるようにしていきたいと思います。
- 「ヘルプマーク」を入口にその先が広がっていくすてきな分科会でした。香取さん、麻田さんおふたりのお話から、参加されている方、皆さんそれぞれの語りがあり、誰もが支えたいし、支えられ（気にかけて）もしたい、と思っているのだと感じました。「ヘルプマーク」を持っている人・持っていない人で自分は気づかぬうちに分けていたと気付きました。
- とても考えさせられる分科会でした。ステキな時間をどうもありがとうございました。当事者である私が今度は誰かのために…この世の中に、困っている人の役に立ちたいです。

企画・運営

神保 彩乃（首都大学東京 ３年）【主担当・報告書】
白井 長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）
杉浦 由希子（NPO 法人両育わーるど）

２３　あなたも教育の担い手になろう
～「開かれた教育」を考える～

開催目的

モノや資金、人々、そして情報の移動がより活発になり、また技術革新のスピードが一層加速して、社会の仕組みが変わっていく中で、社会を支える教育制度の変革も迫られています。そのような状況にあって今の教育に求められているものは、めまぐるしく変わっていく「知識や技能」の定着よりも、新しい知識や技能を生み出す力、すなわち「考える力、表現する力」です。

この「考える力、表現する力」を育成するためには、体験活動の充実が必要不可欠ですが、学校単独だけでは社会からの要望に応えるのに限界があります。そこで視野を広げてみると、学校における教育とは独立して独自の教育活動を展開したり、多様な経験を持った人たちと学校における教育との連携を推進したりする人たちがいます。子どもたちの「考える力、表現する力」を育むための教育プログラムの充実のために、多様な専門性を持った人による教育への貢献が求められています。

本分科会では、このような問題意識を踏まえて、実際に独自のユニークな教育プログラムを展開されている活動者の方々の講演を聴き、「開かれた教育」について考えました。

開催日時

２月 10 日（日）14:00 ～ 16:30

参加者数

28 名（参加者 20 名、出演者４名、スタッフ４名）

出演者

小川 智康さん（NPO 法人 Curiosity（キュリオシティ） 代表／NPO 法人 YouthCreate 事務局長）
石黒 和己さん（NPO 法人青春基地 代表理事）
大本 航慎さん（教育系活動団体 EGGS（イーグス） 共同代表）
加藤 颯さん（教育系活動団体 EGGS（イーグス） 共同代表）

内容・成果・課題

NPO 法人 Curiosity（キュリオシティ）代表の小川さんからは、独自に展開されている高校生の起業体験プログラムについてのお話を伺いました。毎年参加する高校生たちは、約半年間をかけて自分たちが「チャレンジしてみたいこと」を具体的なカタチにしていきます。それは企画をすることで終わるものではなく、しっかりとした「実践してみるプログラム」であることが特徴です。実際に試してみてうまくいったり、あるいはうまくいかなかったりする「リアルな経験」こそが高校生を成長させる原動力となります。この高校生の起業体験プログラムには、大学生と社会人がサポートに入ります。家庭や普段の学校生活では得られない「ナナメの関係」が築けるのも、このプログラムの魅力です。

「百聞百問は一験にしかず」―「体験してみてこそ初めて物事の本質をつかみ、理解することができる」をモットーに今後ともさらにユニークな体験型のプログラムを充実させていくことに関して講演してもらいました。

NPO 法人青春基地代表理事の石黒さんからは、「想定外の未来をつくる！」をコンセプトとしたユニークな教育活動についてお話を伺いました。教育の再定義をミッションとして、「動かして学ぶプロジェクト型学習」や、「学びに携わる当事者たちの豊かな関係性づくり」の実践について紹介してもらいました。石黒さんたちの活動の紹介の中で特に印象的であったのは、教育に対する確固たる理念を描けているということ。この点は多くの参加者の印象に残ったのではないかと思います。

そんな理念を念頭に置きながら、「学び＝動かすこと」をキーワードに、学習者の自主性に寄り添った教育活動の展開、学習者が自ら探求を続けるための工夫などについて具体的に説明していただきました。公立高校との連携の実践例の紹介では、カリキュラムの展開の方法や学校外の協力者（民間企業や大学生など）との協力体制などについて、写真を交えながら紹介してもらいました。実践例の紹介を間近で聞いて、「教育への担い手」になるためのハードルが低くなったと感じた参加者の方も多かったのではないかと思います。

教育系活動団体 EGGS（イーグス）は、10 代のメンバーを中心としたスタートアップの段階にあるグループです。小規模ながら自分の考えを述べたり、相手との議論を行ったりする対話的な学習支援活動をこれまでに行ってきた経緯や、公立中学校との連携についてお話を伺いました。「10 代が中心となって活動を動かしている」ことに驚いた参加者も多かったのではないかと思います。

ユニークな教育プログラムを展開している 4 名の方の講演を聞いて、現在の教育活動の多様性について少しでも実感をしてもらう機会になったと感じています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ３つの団体とも、公的な機関と連携している仕掛けが出来ている所が持続可能性を感じました。さまざまな担い手の方法があり、理念をかかげて取り組まれており勉強になりました。
- 若い人が思いをカタチに実現する力などをしっかり見せてくれて、教育のことをもう一度考えられました。できれば、グループワークがあれば、より良いと思います。
- 地域の人材を教育につなげるにはどのようなやり方があるのかを聞いてみたいと思いました。企業、社会人、高校生というキーワードを「教育」に転換出来るようにしていきたいと思います。

企画・運営

畑佐 憲（あらかわ子ども応援ネットワーク 事務局）【主担当・報告書】
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）
杉浦 由希子（NPO 法人両育わーるど）

２４　対話から始まる市民発の民主主義
～シリアの事例から考える～

開催目的

相手を理解するための基本は「対話」ですが、日本は「対話」が育ちにくい環境にあるとも言われています。日本ではあまり報道されませんが、内戦が続くシリアの現状、市民たちが未来に向けて動き出そうとしている動きについて、長年にわたり紛争地帯で平和構築をしてきた講師からお話を伺うことで、市民の声から始まるべき「対話」を通した民主主義のあり方、日本の現状についても考える機会にしたいと思い、本分科会を企画しました。

開催日時

２月１０日（日）14:00～16:30

参加者数

31 名（参加者 26 名、出演者２名、スタッフ３名）

出演者

小泉 尊聖さん（シリア支援団体サダーカ アドボカシーグループリーダー、
ひろがれ！ピースミュージアムいたばし 共同代表）
枝見 太朗さん（一般財団法人富士福祉事業団）

内容・成果・課題

登壇者の自己紹介から始まりましたが、２人とも長年にわたり平和活動に関わってきています。コーディネーターの枝見さんは、インドでマザー・テレサに出会い、紛争地帯に行って、そこに取り残された人々を救う彼女の活動に感銘を受け、15 年間にわたり彼女の仕事を手伝っていました。また、小泉さんは、学生時代にメキシコに留学したことをきっかけに、その後中南米や中東の紛争地帯で、国連や外務省の職員として 30 年以上にわたり平和構築を専門として活動されていました。国の立場での活動に限界を感じたこともあり、現在は、「市民力による平和の追求」を目指し、日本でも住民主体の平和活動を行っています。

シリアの状況がなかなか日本のメディアで報道されていないことから、世界の国々がどう関与しながらシリアの内戦が続いているのか、内戦前からのシリアの状況も踏まえてお話しいただきました。もともとアサド政権による独裁国家でしたが、異なる宗派や民族が混在する微妙なバランスの中で文化的な社会を営んでいました。それが大きく変わるきっかけは「アラブの春」です。シリア国内でも民主主義を求める動きが見られ、それを弾圧しようとする政府との争いが、どんどん武器を用いた争いに展開していきました。そこに他国が関わってきたことで、今では複雑な国際紛争になっています。2200 万人いた人口のうち、すでに 50 万人が亡くなり、560 万人が難民として国外避難しているとされています。

国内避難者も 660 万人と言われています。そんな状況から、どんな市民の動きが出ているのでしょうか。

昨年シリアを訪れた時の写真を見ながら、小泉さんからお話を伺いました。首都ダマスカスは賑やかな雰囲気でとても内戦中とは思えない様子です。しかし、そこから 30 分も離れると廃墟となった町が続き、かなり厳しい状況であることが伺えました。

小泉さんからは、シリアにおける２つの民主主義のお話しもありました。１つは、独裁政治に対抗する抵抗運動としての民主主義。もう１つは、紛争後の分断された社会を立て直すための民主主義。同じ民主主義を目指す２つのグループが、分断するのではなく、「対話」をすることで草の根として、軍事力で解決できないものを解決していくべき。そのような場を今後作っていく必要がある、そのシリア市民の動きをサポートしていくというお話しでした。

ほんの少し次への動きが出ているシリアですが、まだまだ民主主義には時間がかかります。グループで感想を話した際にも、「シリアの民主主義の動きをもっと聞けると思っていた」という声も聞かれました。シリアで小さく芽生えた民主主義への動きを知り、方や平和に見える日本では本当に民主主義が根付いているのか、もう少し議論を深めたかったのですが、生のシリアの状況に触れ、質問もシリアの状況に関することが多かったので、なかなか思った展開にはなりませんでした。シリアの今後の「対話」から始まる草の根の動きだけでなく、日本における「対話」による民主主義についても、継続して考えていきたいと思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 民主主義が様々な意味を持つことに驚き、新たな概念を得た気がしました。シリアを見る目が変わり、これからに向けて、関心を持ち続けたいと思いました。
- 権力がすごく強い国土の中で、対話はとても難しいということを改めて感じました。それでも声をあげていかないといけないと思うか。日本でもなかなか世の中が良くならない部分もあるので、世界のことを知りながら、日本の事も並行して考えていければ良いと思います。
- 国家レベルであろうが地域レベルであろうが、求められているのは対話なんだと知りました。そのためには、対話の土壌作りの前に、「会話」の環境創りが不可欠であり、そこがないと解決にはならないと考えました。

企画・運営

神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】
阿部 宏大（東京ボランティア・市民活動センター）

２５　若者が動き出すボランティアの受入れ方

開催目的

　何かを求めてボランティアに関わる若者たち。彼らにとって活動先での出会いや経験は大きいものです。しかし、彼らが思い描いていたものと実際の活動が異なることも少なくありません。

　本分科会では、参加者に若者への理解を深めるとともに、普段携わっている活動へのヒントを得てほしいという思いのもと、若者が新たな気づきや達成感を得たり、主体的に動き出したりする活動にするためには、何が必要かについて考えることを目的に開催しました。

開催日時

２月 10 日（日）14:00～16:30

参加者数

37 名（参加者 28 名、出演者２名、ボランティア２名、スタッフ５名）

出演者

松浦 貴昌さん（ＮＰＯ法人ブラストビート 創業者・理事）
小倉 千春さん（立正大学 ボランティア活動推進センター ボランティアコーディネーター）
鹿住 貴之さん（認定ＮＰＯ法人ＪＵＯＮ（樹恩）ＮＥＴＷＯＲＫ）
釜島 豪顕さん（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）

内容・成果・課題

〇内容
◎自己紹介
　グループ内で、分科会に参加した目的や普段の活動で困っていること等を共有しました。
◎出演者による事例発表
・小倉さん
　大学ボランティアセンターで大学生を送り出す中間支援の立場から、最近の若者の事情、興味を持ちやすい活動内容、受け入れ先へのお願い等をお話していただきました。若者が興味を持ち、継続して活動するにはどのような人と出会うか等の「環境面」と、やりがいや達成感等の「心理面」の充実が欠かせないとのことでした。

・釜島さん
　高齢者施設で中学生・高校生を中心にボランティアの受け入れを担当している立場から、実績・体制や具体的な若者とのコミュニケーションについてお話をしていただきました。名前を呼んで挨拶することやハイタッチの有効性、ボランティア希望を受け入れ側の都合で断らないこと、活動後の振り返りの時間の確保、来た時と帰る時に顔を合わせる重要性等、具体的な配慮について教えていただきました。

・松浦さん
　若者のエンパワメントに携わってきた松浦さんからは、ボランティア活動に関わらず、若者が成長するには何が必要なのか、関わるときに意識すべきこと、若者を育てる組織づくり等についてお話していただきました。若者が力を発揮するためには、組織のビジョンや思いを共有することや、一人ひとりがありのままでいることができる「心理的安全性」が重要とのことでした。
〇感想共有、質疑応答
　グループ内で、事例発表を聞いて参考になったことや、今後取り組めそうなことを話し合いました。質疑応答では、活動を通した若者の変化や若者との関わり方を中心に活発な意見交換が行われました。
◎成果と課題
　様々な分野で活動する参加者が集まり、若者が主体的・継続的に動くために何が必要かについて考えていきました。事例発表や話し合いを通して、活動や関わり方の具体的な工夫を学ぶことができました。また、若者が心を動かし、成長していくためには、受け入れ側の思いを伝えることや、安心して活動できるような環境を整えることが重要であることをあらためて感じました。若者に関わる大人の一人ひとりの意識はもちろん、様々な立場が連携して、若者を育てるという共通認識のもと、よりよい協力体制を整えていくことの必要性を感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・大学生、高校生、中学生が達成感を持ってボランティアに関わることが大切であることを再認識しました。
・新しい発見が多かったです。特に現在の学生の様子など中間支援組織が考えなくてはならない点などいくつもヒントがありました。
・「若者」ではなく「人」としてどう接するのかという基本的なことを改めて確認できました。

企画・運営

村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）【主担当】
釜島 豪顕（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）【主担当・報告書】
鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）
直井 友樹（NPO 法人 NICE）
芦澤 弘子（聖学院大学 ボランティア活動支援センター）

２６　芸術のバリアフリー　音声ガイドをつくろう！

開催目的

　視覚障害があっても映画を楽しむ人はたくさんいます。近年ではバリアフリーの映画館だけではなく、スマートフォンアプリで音声ガイドを聴きながら一般の劇場でも映画を楽しめるようになりました。同時に、「視覚障害があるのに映画を見るの？」と驚かれる方が、たくさんいるのも事実です。音声ガイド制作という共同作業を通して、障害に対する自身の思い込みに向き合うだけではなく（視覚障害の有無に限らず）情報取得や対話の大切さを体感し、考え話し合うことを目的に開催しました。

開催日時

２月 10 日（日）14:00～16:30

参加者数

16 名（参加者 10 名、出演者 1 名、スタッフ５名）

出演者

松田 高加子さん（Palabra 株式会社）
講師プロフィール：
2001 年より視覚に障害のある人と一緒に映画鑑賞を楽しむサークルに参加し、音声ガイドのノウハウを当事者と一緒に構築。４年半の配給会社勤務を経て、現在は自動同期アプリ UDCast の運営に携わりながら、映画・映像の音声ガイド制作に従事しています。

内容・成果・課題

　視覚障害を持つ方が、どのようにして映画を「観る」のでしょうか。最初に、松田さんが音声ガイド制作を仕事として選んだ理由を「視覚障害を持つ友人と映画に行くだけで周囲に褒められることに違和感を持った」というエピソードを交えてご紹介いただきました。確かに「友人と楽しむ」という、当たり前の日常を褒められるということは、めったにありません。しかし、視覚障害をお持ちの方々が「どのように映画を観る」のが、疑問に感じることも事実です。そこで、まずはみんなでアイマスクをした状態で「じゃんけん」をしました。見えない状態で、どのようにして勝敗を確認するのか、実際に体験してはじめて気づくことがありました。

体験のあと、実際に映画のワンシーンを「音声ガイドあり」「音声ガイドなし」で、見比べました。視覚障害を持つ当事者からも、その違いでどのように感じたかをお伺いし、イメージを持ったところで実際のガイド制作です。４つのチームに分かれてドキュメンタリー映画のワンシーンにそれぞれ音声ガイドを付けました。各チーム、熱心に作成いただいたあとは、朗読発表会です。

驚いたのは、同じシーンでもそれぞれ見え方や表現の仕方が違うことはもちろんのこと、情報量も違うことです。さらに、当事者に感想を聞かせてもらい「どうすれば伝わるか」をみんなで検討しました。そこでわかったことは「映画鑑賞」をするにあたって当事者は様々な想像力を働かせていることです。それを掻き立て、かつ映画の伝えたいことを加味すると、おのずと必要な情報がみえてきます。少なくてもだめ、多くてもだめ。相手を想像することの大切さを再認識しました。

参加者からは「視覚障害を持つ家族を誘って映画を観に行こうと思う」「これを機に音声ガイドを作ってみたい」という今後につながる具体的な行動への宣言がきかれました。また、視覚障害というシチュエーションに限らず、対話や関わり行動、情報共有の在り方の大切さを再確認できました。あわせて、私たちが社会に貢献できることは、日々の生活の中に無限にあることが感じられました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 音声ガイドも含め全てのボランティア活動に共通する事は「自己満足で終わらない」「こうあるべきだ」と決めつけない事が大切なのだと再確認しました。
- 音声ガイド制作にあたり、実際に手を動かして、グループ内の意見を聞いて、そして先生のサンプル話を聞いたことで、「違い」がこれほどまでに明確に出るものなのか！と驚いきました。
- 何を伝えたいか大事ですが、それは聴く人の側に立った「何」であるかが大切なのだと改めて感じました。
- アイマスクを付けて、ペアの方と声を出さずにじゃんけんをして、触れ合っていろんな気持ちが伝わることも実感として分かりました。

企画・運営

森本 美花（NPO 法人日本ゲートキーパー協会）【主担当・報告書】
鈴木 正昭（りすこ［おおた復興支援活動連絡協議会］）

２７　音と光がない世界「盲ろう者の生活を知る」

開催目的

日本で初めて生まれつきの盲ろう者が大学を出たということで一時、盲ろう者が話題に取り上げられたことを皆さんはご存知ですか？

世間での認識はあまりない状態です。例えば手話なら、ドラマなどがきっかけで手話を学ぼうという聴覚障がい者理解につながる動きが高まります。しかし一方で、「盲ろう者」つまり見えない、聞こえないという障がいへの理解の壁は非常に厚いと思われます。もし知ってもどう対応していいのかわからず、関わろうとしない傾向が強いと考えられています。

また、見えない、聞こえないという状況は、移動が大変に困難を極めます。これは「移動障害」とも言われ、わたしたち市民の１人１人の力が必要になります。そのために、盲ろう者の当たり前の生活を知ってもらうことから始めることが大事なのではないかと考えました。

今回の取り組みで、特に障がい者支援などに関わっている方々の理解を深めて頂きそれぞれのフィールドで支援の輪を広げるきっかけなることを期待し企画しました。

開催日時

２月１０日（日）14:00～16:30

参加者数

30 名（参加者 27 名、出演者１名、スタッフ２名）

出演者

森 敦史さん（筑波技術大学 大学院２年／東京盲ろう友の会 副理事長）

内容・成果・課題

「盲ろう者とは何か？」「どんな障害なのか？」を考えて頂くために、どんなイメージを持っているかを参加者の皆さんが３分ほど、考えてもらいました。その後、森さんよりクイズを出してもらい、盲ろう者の程度の違いや、コミュニケーション方法が色々あることを話して頂きました。さらに、森さんが一番困ることは何か？という点もクイズを通じて理解をしてもらい、周りの人と会話することができないことが非常に困っていると認識してもらいました。

盲ろう者には、目が見えないだけではなく、耳が聞こえないという２つの障害が重複しているので、まず「声でやりとりする」というコミュニケーション方法が使えません。どのようなコミュニケーション方法を使えればいいのか？というクイズにも皆さん頭を抱えるような様子でした。

また、話だけではわからないので、実際に「盲ろう体験をしてみよう」という時間を設け、アイマスクと耳栓が配られました。それぞれ二人ペアになり、一人がアイマスクと耳栓をし、もう１人は、相手に話したい内容を掌に文字を書き伝えます。ほとんどの方が、何を書いているのかわからない、これでコミュニケーション取れるのがすごい！という声があがり、皆さんが気づきを得られたと実感しています。最後には、盲ろう学生の支援体制について伺いました。盲ろう学生支援も前例も非常に少ないこと、また、森さん自身が大学で授業を受けてる姿など写真も見せて頂きました。大学で授業を受けているときは、通訳介助が必要なので、その写真を見せて説明して頂きました。

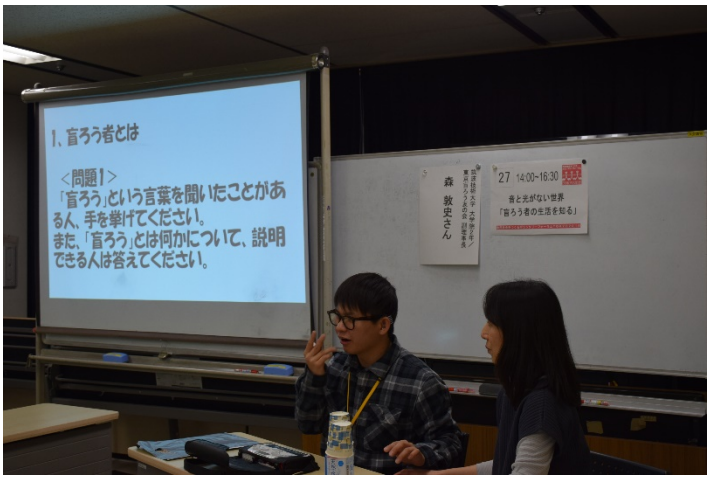
この企画を通して、参加者がそれぞれの活動の場で、盲ろう者について伝える役割を担ってくださることを期待しています。

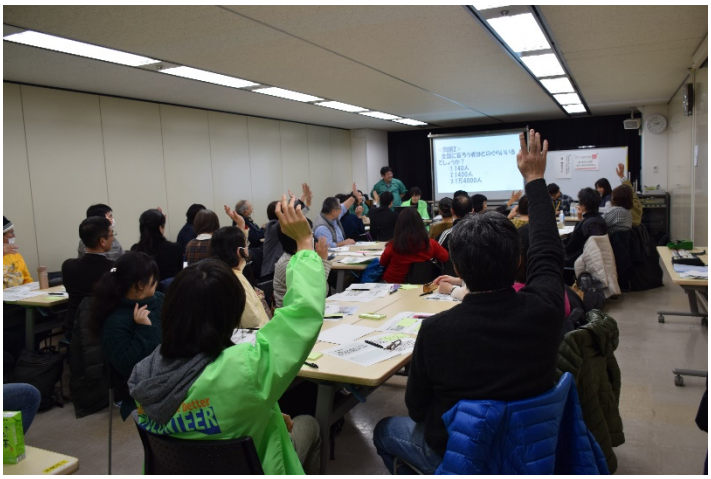
参加者の声（アンケート結果などから）

- 盲ろう者に対して、誤解していることが多い自分に気が付きました。
- 手話を学んでいることもあり、「ろう」については、ある程度知っていることが多かったのですが、「盲ろう」となると、知らないことが多々あるとわかりました。ワークはとても楽しく大変よかったです。
- 時間が短く、問題とすることが多すぎる、こういう機会をもっと開いていただき、勉強させてもらいたいと思いました。盲ろう者の生活については一度お聞きしたので、知っていると思っていましたが、まだまだです。。
- 知らない世界を知ることができました。
- 盲ろう者の支援活動がしたいです。
- 盲ろう者の中でもコミュニケーション方法や特徴が異なることを知り、今後、聴覚障害者や視覚障害者の方々への支援に生かしたいと思いました。

企画・運営

石橋 茜（東京盲ろう者友の会）【主担当・報告書】
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）





２８　クロージング企画「本当のボランティアって何だ?!」

開催目的

　オリンピック・パラリンピック、被災者支援、就職活動、大学入試などさまざまな場で話題にあがる「ボランティア」。子育て、貧困、人権、障害者、外国人、若者の居場所、高齢者介護など、多様化する社会的課題の対応はもはや国家の制度や政策では対処しきれない現実があります。果たしてボランティア活動は国民にとっての義務なのでしょうか？クロージング企画として、原点に立ち返り、ボランティアの本質を登壇者と、そして参加者と共に考えていく時間となりました。

開催日時

２月１０日（日）17:00～19:00

参加者数

102 名（参加者 64 名、出演者４名、スタッフ 27 名、ボランティア８名）

出演者

小野田　全宏さん（NPO 法人静岡県ボランティア協会　理事長）
枝見　太朗さん（一般財団法人富士福祉事業団　理事長）
山崎　美貴子さん（東京ボランティア・市民活動センター　所長）

内容・成果・課題

　2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催まで１年半、2018 年末に締め切られた大会運営ボランティアの募集は、予定人数を大幅に超える人が集まりました。多くの外国の方々が来られる中、日本国民としてボランティアに携わる姿勢や、ボランティアとして本来の活動はどのようにあるべきか、それらの原点をいま改めて考えたいという趣旨で開催しました。今回は小野田　全宏さん（NPO 法人静岡県ボランティア協会　理事長）、枝見　太朗さん（一般財団法人富士福祉事業団　理事長）、山崎　美貴子さん（東京ボランティア・市民活動センター　所長）が登壇しました。

　まず、枝見さんより「ボランティアとは何なのか？」との問いが提起されました。以前のボランティア活動は、社会で苦境に生きる人達を支えるなど、ボランティアする側はとても辛い状況も過去に多くありました。しかし現在のボランティアのありようは、授業の一環として、総合学習の中のボランティアポイントに変遷してしまいました。また、組織が綿密にお膳立てしたボランティア活動となっているのではないでしょうか。極論を言えば、就職の際にボランティア経験を書き込むことが目的であることをよく耳にします。自分自身で考え、今何をすべきか、何ができるかを生み出すことが少なくなってきたのではないでしょうか。このような背景から今回のクロージングでは、これまで第一線で活躍されてきたお二人からどのような想いでボランティア活動に携わってきたか、その生の声をお聞きしました。

小田野さんは元々トラックの運転手であったが、「健康な子供は自分の意思で青空の下にでることができるが、重たい障害を抱えて青空の下で過ごすことができない人がいる」、このエピソードを聞いたことが発端となり今のボランティア活動に従事するようになったといいいます。ご縁があり病院のバスの運転手として誘われ、当事者の取り巻く現状を知ることとなります。そしてラジオ番組に静岡県知事と出演する機会があり「ボランティア活動の拠点となる場所を作りたい」と 43 年ほど前に訴えたのが静岡ボランティアセンターを発足したキッカケであったといいます。

山崎さんはこれまで市民活動と行政の間の組織として、一人一人のボランタリズムを大切に行動してきました。ボランタリズムは楽しさや正義などさまざまな個々のボランティアへの想いがあると語りました。それはボランティア活動を実践する主体としての存在であり、共感という主体的な行動要因があるものです。ボランタリズムに立つとは、一人一人の市民が一つの社会で役割を果たしていくことであると紹介されました。

現在、多くの NPO 法人が認証を受けていますが、ほとんどの団体が資金面で苦難の道にあり、その面で解散する姿を多く見てきました。しかしながら市民のニーズは多様化してきており、行政では担いきれない問題も数多くある中で、それら NPO 法人がそれらニーズに対応してきましたが、現状憲法 89 条の規定により公的なもの以外のものへの支出ができない現状があることも大きな課題となっています。物が無い時代からある時代へ変革し、物質を持つ存在様式からある存在様式への変化が現れてきた、ボランティア市民活動は未来を拓いていけるのか中間支援組織としてのボランティア市民活動センターの在り方について問題が提起されました。

後半はパネルディスカッション形式で話が進んでいきました。まずは小野田さんより、今後の課題として、大変なボランティア施設へ行く学生が減ってきている現状があります。しかし、ブーム的なものとしてのボランティアではなく、社会を変えていく、そういうマインドを持った、いわば参画していくボランティア活動が本来は求められていくのを目指したいと語りました。山崎さんは、自分で気がつくことができたことや、疑問に感じたことから始める。そして自分が主体として、自分自身を大切に行動するボランティア活動といった「ボランティアの軸」を持ちながら一歩前へ進むことが良いのではないか、入り口があったことで思い返すことから何かを学ぶこともあるのではないかと語りました。

会の終了時の質疑応答にて、学生のボランティアから「私は単位があるから今回参加した、もしそれがなかったら参加していなかった」と話がありましたが、司会から参加してどうだったかと返した時に、「参加して良かった」との返信がありました。参画から参加と世の中のボランティアの導入は変わりましたが、その本質としての役割はどの様な変革があってもきっと機能しているのではないかと考ええました。

企画・運営

神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当】
白井 長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）【報告書】
宮崎 雅也（日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター）
釜島 豪顕（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）
相澤 若葉（東京ボランティア・市民活動センター）

２９　Open Café（休憩スペース）

開催目的

分科会の合間に一息つきたい、知り合った方ともっと話したい…。
参加者・来所者とともに、くつろぎと交流のスペースをつくります。

開催日時

２月９日（土）・10 日（日）　10:00～17:00

参加者

ボランタリーフォーラム参加者の皆さん、実行委員、ボランティアスタッフなど
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん

内容・成果・課題

休憩スペース（カフェ）の運営と、交流のきっかけづくりのために、いくつかの仕掛けを用意しました。

- 数種類のインスタント飲料（コーヒー、カフェオレ、紅茶、ココアなど）を用意し、自由に飲めるようにした。
- 「家庭用焼き芋焼き機」でホクホクに焼けた紅はるかを、一口サイズに切って提供した。
- 本格的なお抹茶セットを遠方からお借りし、お抹茶の先生にもご協力いただいて、不定期にお抹茶を立てた。

ボランティアスタッフや実行委員などの担当者は、参加者と楽しく会話や手話の勉強をしながらも、ポットのお湯を継ぎ足したり、衛生的な空間を保てるように、ごみの片づけをしたりしていました。

ボランティアの声

- 「焼き芋」というアイデアが最高でした。とても季節に合っていたと思います。
- 立ち寄られた方にはとても好評で、とても和やかに過ごせる場になっていたと思います。
- お抹茶を立ててもらってお話をしながら飲んでいると、時間がゆっくり流れているように感じました。
- 様々な人と交流することができとてもよかったので、「オープンカフェがある」ということを、もっと多くの人に周知したかったです。

企画・運営

山崎 美貴子（東京ボランティア・市民活動センター 所長）
石橋 茜（東京盲ろう者友の会）
神保 彩乃（首都大学東京 ３年）
ボランティアスタッフ 15 名
東京ボランティア・市民活動センタースタッフ ３名
フォーラム事務局【報告書】

OPEN CAFE

３０　ふれあい満点市場～ＮＰＯ・ＮＧＯの作品展示販売～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。ふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しています。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことを聞いてみませんか。

参加団体

17 団体・40 名

＜団体名＞ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／東京都青年団体連合／ＮＰＯ法人共同作業所かたくり／ＮＰＯ法人地球と友と歩む会　ＬＩＦＥ／ＮＰＯ法人飛鳥会　つばさ工房／オレンジライン／幼い難民を考える会／わぴねす／困ったときの SOS／フリー・ザ・チルドレン・ジャパン／民間相談機関連絡協議会／国際エンゼル協会／難民自立支援ネットワーク／チェリッシュアロマの会／シャロームみなみ風／はあもにい／東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果と課題

「ふれあい満点市場」は、福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品を東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ１０階）で常設された委託販売スペースです。顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという想いをこめていますが、実際に活動されている方とふれあう機会はそんなに多くはありません。出展会場は、セントラルプラザ１階の区境ホールで、吹き抜けで明るく、人通りもあるオープンスペースです。セントラルプラザへ来所された方や買い物にいらした方、単に通行された方も気軽に立ち寄っていただけるような雰囲気づくりをし、そこで作り手の顔が見え、思いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。団体の方は商品についての工夫した点やこだわった点などを積極的に伝えたり、団体の活動についての質問に丁寧にお答えする方もいらっしゃいました。今年度は参加団体が多く、賑やかで、団体同士活発に意見交換や交流ができていました。また、今年も都立新宿山吹高校の生徒さんに出展団体の販売のお手伝いや出張販売、チラシの配布等ボランティアとして協力してもらいました。生徒さんにとっても団体さんにとっても貴重な交流の場となったようです。

企画・運営

西山 はな（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

都立新宿山吹高校ボランティアの生徒さん

３１　情報誌『ネットワーク』表紙原画展

開催目的

東京ボランティア・市民活動センターで発行している情報誌『ネットワーク』（隔月刊・24 ページ）の表紙原画展を開催しました。2016 年度より、フローラル信子さんに描いていただいている表紙は、「市民活動のイメージをとらえている」「特集記事にリンクしたイラストなので、以前よりも内容が読みやすくなった」「絵に“愛”がにじみ出ている」など、好評をいただいています。

今回、本誌を知らない多くの方にも見ていただこうと、昨年に引き続きボランタリーフォーラムとのタイアップ企画とさせて原画展を催しました。

開催日時

２月８日（金）～２月 10 日（日）

参加者

ボランタリーフォーラム参加者の皆さん、実行委員、ボランティアスタッフなど
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん

出演者

フローラル 信子さん（イラストレーター）

内容・成果・課題

イラスト掲載号の特集テーマを添え、特集から着想したイラストを楽しんでいただけるようにしました。原画との質感の違いがわかるよう、印刷後の表紙も並べています。また、原画を送ってくださるときに同封されている、イラスト付きお手紙も掲示させていただきました。

原画展のおもな目的は、素敵なイラストを多くの方に見ていただくことです。そして、ゆっくり眺めることで、フローラル信子さんがどのような想いや視点で描いてくださったかを、皆さんに自由に想像

していただいたり、お手紙からフローラルさんの優しさや心配りを感じていただけたら……という隠し目的もあります。

もう一つは、原画と印刷との違いを見ることで、NPO やボランティアグループで印刷物をつくるときなどにも参考になるかな…という間接的な狙いもありました。

ボランタリーフォーラム会期中は、Open Café を開催しており、原画展とともにフリースペースは華やかな雰囲気になりました。お茶やコーヒー、お菓子を口にしながら、イラストを眺める人びとの姿も多く見受けられました。イラストはフォーラムの前後も掲示していたので、参加者以外にも多くの来所者の方に見ていただきました。

イラストを撮影していた方々がいて、人数は多くないものの、年代がさまざまだったことに、フローラルさんのイラストの魅力を実感しました。

参加者の様子

ご覧になった方からは、「カワイイ!!」などのご感想をいただきました。数名で談笑しながら、あるいはお一人でじっくりと見ている方の姿が印象的でした。また、フローラルさんのイラストは、柔らかなタッチと、和やかな表情の人や動物たちが特徴ですので、その優しい雰囲気にリラックスしている方が多かったように感じました。

企画・運営

秋池 智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当】
佐藤 新哉（東京ボランティア・市民活動センター）
山口 いさえ（東京ボランティア・市民活動センター）
阿部 宏大（東京ボランティア・市民活動センター）【報告書】

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO
開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランタリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランタリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランタリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランタリズム
10	2014	「気づく・築く　市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランタリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランタリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと 出会いをもっと」	社会・しくみ、ｺﾐｭﾆﾃｨ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来

＊2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2019 実行委員会名簿

	氏 名	所 属 団 体	備考
1	芦澤 弘子	聖学院大学 ボランティア活動支援センター	
2	粟澤 稚富美	公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター	
3	石橋 茜	東京盲ろう者友の会	公募
4	市川 徹	株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団	
5	上田 英司	NPO法人日本ＮＰＯセンター	
6	枝見 太朗	一般財団法人富士福祉事業団	
7	鹿住 貴之	認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK	
8	釜島 豪顕	社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑	
9	神元 幸津江	いたばし総合ボランティアセンター	委員長
10	坂本 浩行	生活協同組合パルシステム東京	
11	佐藤 優衣	駒澤大学 ３年	
12	白井 長興	NPO法人シェイクハートプロジェクト	
13	神保 彩乃	首都大学東京 ３年	公募
14	末永 明日香	NPO法人シェア＝国際保健協力市民の会	
15	杉浦 由希子	NPO法人両育わーるど	公募
16	鈴木 正昭	りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会）	
17	高橋 義博	府中市市民活動センター プラッツ	副委員長
18	直井 友樹	NPO法人NICE	
19	成田 早紀	荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター	
20	畑佐 憲	あらかわ子ども応援ネットワーク 事務局	
21	水田 征吾	調布市市民活動支援センター 運営委員	公募
22	宮崎 雅也	日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター	
23	村瀬 つむぎ	NPO法人グッド	
24	森本 美花	NPO法人日本ゲートキーパー協会	公募
25	坂口 真	NHK厚生文化事業団	＊

（50音順・敬称略）
＊オブザーバー

●事務局

	長谷部　俊介	東京ボランティア・市民活動センター	
	熊谷　紀良	東京ボランティア・市民活動センター	
	谷口　陽香	東京ボランティア・市民活動センター	
	阿部　宏大	東京ボランティア・市民活動センター	
	相澤　若葉	東京ボランティア・市民活動センター	

■協賛・協力

＜　特　別　協　賛　＞

株式会社ガイア

株式会社三菱 UFJ 銀行

生活協同組合パルシステム東京

中央ろうきん社会貢献基金

トヨタ自動車株式会社

＜　協　賛　＞

NEC ネッツエスアイ株式会社

NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団

公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

東京都生活協同組合連合会

＜　協　力　＞

ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

（50 音順・敬称略）

✿ボランティアでご協力いただいたみなさま✿

Ｖフォーラム実施にあたっては、
のべ 46 名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、企画、当日の受付や会場誘導、
分科会の運営など、さまざまな場面で支えていただきました。
ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま

Ｖフォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の全体や分科会の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、
企画・運営に携わる実行委員のみなさま、
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2019

報　告　書

〈発　行〉　市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO 2019実行委員会
事務局　東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171　/　FAX 03-3235-0050
http://www.tvac.or.jp

〈発行月〉　2019 年 4 月